鶯宿雜記

四百九十一

四百九十二

238
289
1

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

238
577
1

鶯宿雜記

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

森名城門
駒井家蔵

国立国会図書館　鷺宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鷲宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鷺宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

〇腰巻 参考保元物語 [illegible]

[illegible] 源氏重代の鬚切友切の二振を [illegible]

[illegible] 太刀二振の [illegible] 源氏の [illegible]

[illegible] の後は [illegible] 二位殿へ [illegible]

[illegible] 氏に譲り [illegible]

[illegible] 氏の子も氏 [illegible] 二振の太刀を西 [illegible]

[illegible]

[illegible] 西国へ [illegible] 太刀 [illegible]

[illegible] 今川家の重宝とす [illegible] 長氏 [illegible] 今川二男

[illegible] 入 [illegible] 国 [illegible] 今川 [illegible]

[illegible]

[illegible] 源氏の重宝 [illegible]

〇膝丸 [illegible] 今川と [illegible] 公方 [illegible]

[illegible] 吉良 [illegible] 今川の [illegible]

[illegible] 今川の氏 [illegible]

[illegible] 鬚切友切ハ二振の名 [illegible] 友切 [illegible]

[illegible] 源満仲 [illegible]

[illegible] 長二尺七寸 鬚切 [illegible]

[illegible] 鬚切を鬼丸 [illegible] 鬼丸を獅子の子

[illegible] 膝丸と [illegible]

[illegible] 獅子の [illegible] 小烏の太刀 [illegible]

〇 [illegible] 友切 [illegible]

[illegible] 熱田の [illegible]

〇著長 [illegible]

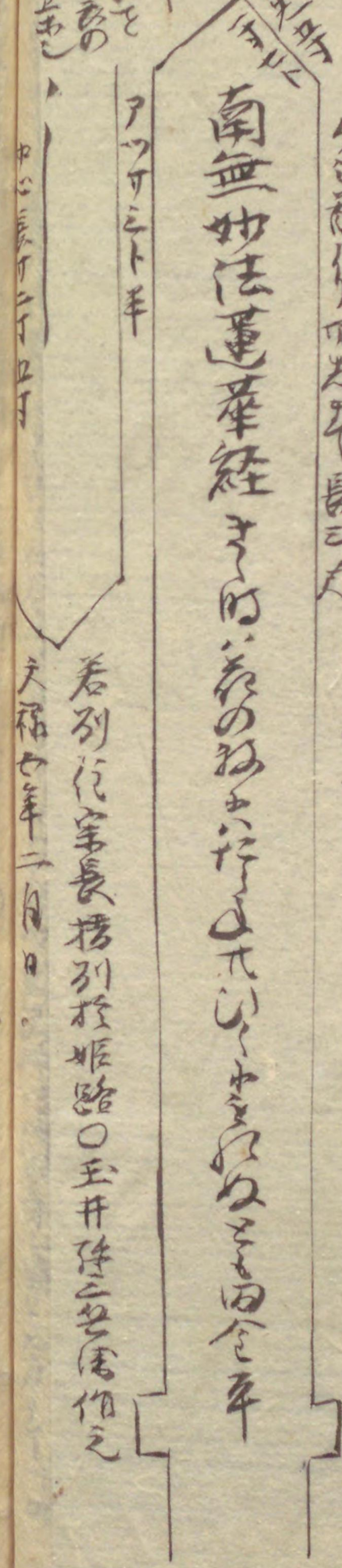
国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

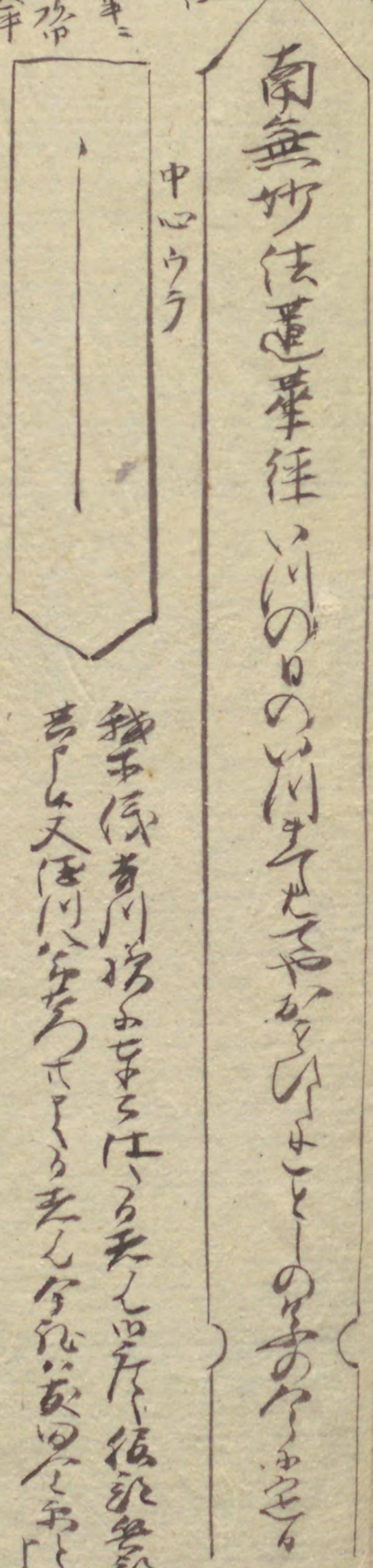
ガラス使用

大文字を書ておる
正金ト書てある也
△白幡稲荷大明神
荒神金紋の陣羽織に
小手袋ハ白稲荷の鳥居
子より上ハ手帯なり
△大口 是書記名湯代々更ある八白旗の紛らはしきゆへ大口は是にて前書後是紋有り又金物但明神ハ紋なり
とよぶ 他家の紋より大く 鬼丸か刀ハ粟田口国綱作 拵ハ浅紺川
宗の好ミにて 家門の古代二引紋 大将の日本之第一也
△小旗黒地に白字にて書
刀帯ハ白 後ハ赤二 布陣に上る大坂陣之節 忠臣 大
若王子物見せさせよ
とされハ刺て是結
神君の御筆 大奉書ニ而 御本陣ニ而吉 ニさ
黒金小旗の前立 上二段の大手紋にて 鬼丸是ハとりの一従 播州多田の社に奥
白小旗是も大手なり
深羽矢を余るを以て
さる也りて得たる物なり
切丸を伯耆国安綱作として
元録の頃黒金小旗一
小旗一流宛に立て
紙表二塚中にて
執権にて行事なり
村田金平とよぶ人の持院とて 大坂御手に在りしを 宝保中江府な
来る
ケ之首より切先まで長三
△採鳥帽子
台皮の家紋なり
盛書記名
金紋の陣羽織
右之家の名也
元和の頃年手に ふを
大将とて白の系図の
神前へ是を奉り 五ふ



若州住宗長 播州於姫路 玉井隆一 之作之
天保七年二月日

ナリ 是ハ又八幡
金紋の陣羽織
是一番の旗
書き絵せ採鳥
帽子に着て前仕
物の如く也として
△前頭巾黒幕に
大名衆ハ頭巾前布
黒幕付て前仕
其他の大名前後
ミ結帯也より大手
を汲て其裾巾
△連判之三年 御旗本の役目
家紋より始め
其母の国の家紋
つもりの家浦の世
とよぶの内を其えたし
十に三あるをいたすを
者より寺ゆのまれ
家と誉りかしこまりて
みの家余て其紋



銘ハ備前国住長光(?)とあり 刃長二尺三寸四分 ...
其次ハ又但州の住人 ... とよぶ

とよぶ 村正家康の作 是ハ大手の作 人の 鬼の ...
遠江ノ西念寺にありて 脇指一 大住ノ国の作
つよくを橋丸大平の作も 刃長サ七尺 橋丸
さまでの 一人ともいふものを 家の持院の西にあるなりけし
九鬼右馬介嘉隆ハ本国紀州熊野にて九鬼といふ所より出たる人にて
仍て志摩国を切取て 以来 別に相差 和泉小原 荒木 長門国
居城として地方を 一国を領し
連判之家 志摩の国を領して 鳥羽の城に住す 其子守隆の代にいたり
遠江国 是は志摩の浦に住す の内
連判之人自ら手牛草 是はの家の鳥居を入れて の也

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

△重著兜ハ、[illegible]兜を[illegible]帽子兜ニ[illegible]兜を[illegible]半首頬を半頬[illegible]て七七[illegible]半首ケ帽子兜[illegible]

△重服甲冑ハ、武紀ニ有勇敢士曰大分君稚臣別ニ[illegible]長ニ以重擐甲抜刀[illegible]

（右頁本文）[illegible]武尊[illegible]山[illegible]首[illegible]

△衣中服著甲事 記日[illegible]以平心 随兼御馬到云云 大長谷王仮言傍云 即衣中ニ服甲取帰 矢[illegible]兼萬出行従 忽之間自馬往[illegible] 枝矢射落 尋[illegible]王[illegible]日本紀ニ玉田宿祢甲服ニ裨中参[illegible]甲[illegible]自ニ衣中[illegible]出

[illegible]大平記ニ[illegible]勤[illegible]持衣下ニ[illegible]生[illegible]衣の下[illegible]

△混里平治物語[illegible]

△奉甲 日本紀敏達帝十二年条ニ日羅 和甲著馬到二門底下 乃進ニ廳前 進退跪拝 云々 解ニ其甲 奉ニ於天皇ニ

一説云 重実[illegible]義家の末 高橋 井[illegible]河内[illegible]主従 重久[illegible]

九と云 是よりおこりて 幸若[illegible]舞曲を[illegible]す

△著大将甲冑鎧ニ 文治元年十月廿四日夜 南御堂供養候に 木高綱著御甲候 前庭ニ観者雅之云々 照云著甲ノ上為失云々 高綱ハ吉人重用ニ比 吉高綱ニ噫曰著

義兼 上総介 義胤 桃井[illegible] 頼直 [illegible] 直頼 直常 直知 中務大輔
直詮 宮内大輔 幸若丸 自[illegible]代 女子 越前大野郡 松田[illegible]妻 幸若[illegible]家祖也
直継 [illegible] 義継 九左衛門 自鎌倉殿[illegible] 三子[illegible] 義継 [illegible] 義安 幸若八郎大夫
義重 幸若八郎九郎 織田信長公賜[illegible]太刀 新藤五国光刀 [illegible]於若寺 善慶 呈竹 幸若[illegible] 家祖ナリ
直次 幸若八郎五郎 義門 幸若八郎九郎 神君於伏見城[illegible]小脇差[illegible]
義正 幸若八郎九郎 重信 幸若八郎九郎 直良 幸若八郎九郎

△毛沢世[illegible]之者[illegible]進之者也加巨雅

将[illegible]朝[illegible]田[illegible] 延宝五年先祖ニ[illegible]松平周防守[illegible]

[illegible]御[illegible]旗本[illegible]仕官[illegible]

半[illegible]井 桐 勘[illegible] 紋時 舞 須

△鉄著初[illegible]東鑑ニ文治四年七月十日若君始令著御甲之給於南面有其儀時刻[illegible]

二品出御江[illegible]参進上[illegible]若君出御武蔵守義信[illegible]北条[illegible]能[illegible]朝政持参御甲直兼[illegible]奉[illegible]時[illegible]山[illegible]御[illegible]

備考之部 錦旗日本紀府明元年条ニ錦旗秘日余ニ私説未詳仰後説ニ云今現在此旗之如錦 △旌旗 日本紀神皇后紀ニ旌旗

錦乱則士卒不整 [illegible]

織田信長ニ楠摂河の陣ニ采配ハ牝馬ノ尾 [illegible] 後授 [illegible] 馬十三

旗總名也 将軍所載 [illegible] 牝馬ヲ [illegible] 采配

日本紀 [illegible] 所載 濃田山城守長頼 [illegible] 後 [illegible] 尾

日ニ軍 [illegible] 別の人ニ [illegible] 年の [illegible] 有 [illegible]

[illegible] 尾長熱田神宝ニ蜘蛛切丸大刀 [illegible] 小吉程ニ亀王丸ト [illegible]

伊勢大神宮 [illegible] 梅ケ枝大刀ハ源満仲手二 [illegible] 工 [illegible] 名膝丸ニ改ム

[illegible] 子摂津守頼光ニ之時切ニ蜘蛛之妖ニ故為之名 [illegible]

△旗銘 [illegible] 頼基伊豫守頼義陸奥守 [illegible] 相傳為

[illegible] 善 [illegible] 大刀ヲ以テ改号吼丸 [illegible] 野別当 [illegible] 神

[illegible] 庫蔵 [illegible] 伊予守義 [illegible] 年以 [illegible] 大刀

東 [illegible] 相 [illegible] 箱根之神祠 [illegible] 三年箱根別当 [illegible] 大刀私ニ

[illegible] 時殿 [illegible]

△旗 [illegible] 授曽我五郎時致ニ云々 誅ニ頼羽 [illegible] 此後世有故 [illegible] 熱田神

[illegible] 庫ニ云々祠官 [illegible] 大刀為京師刑工吉光所造者 [illegible] 也

△ [illegible] 本阿弥家古書曰天国 大宝年中 [illegible] 八剣 國盛

[illegible] 国盛作 尾張 宗近 又号吉家 膝丸 秋丸等ノ作者 国光 住相州山内 [illegible] 吉光 [illegible] 外

△乳 [illegible] 藤 [illegible] 正宗 [illegible] 貞宗 高木 安国

[illegible] 宇田村 [illegible] 大刀 [illegible] 大神宮 [illegible] 兼 [illegible]

[illegible] 一 [illegible] 国安芸郡 [illegible] 山ハ空海の [illegible] 東寺 [illegible] 実ハ明 [illegible]

[illegible] 院 [illegible] 寺 [illegible] 法性の [illegible] 代ハ [illegible]

[illegible] の [illegible] 二 [illegible] の [illegible]

△ [illegible] 信長 [illegible] 二十七 [illegible] 東の [illegible] 八十七 [illegible]

[illegible] 信 [illegible] 都ハ [illegible] 後 [illegible] 国 [illegible]

国立国会図書館 鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

而勿軽敵強而無屈則折暴勿聴自服勿殺遂戦勝者必有賞負背走者自有罪

用ひ追て闘ひするの法を定

元禄十年綱吉公令ト下阿波[illegible]代天子陵[illegible]及

△陣法博士 日本紀天武天皇十二年十一月詔諸国習陣法 持統七年十二月遣陣法博士等教習諸国

[illegible]陵新人[illegible]士民[illegible]道[illegible]下

翌年両国古跡[illegible]上[illegible]馬[illegible]字

阿波国[illegible]村[illegible]天皇[illegible]帝[illegible]

△陣法 続日本紀天平宝字四年十一月遣授刀舎人春日部三関中衛舎人土師宿禰関成等六人於大宰府就大弐吉備朝臣真備令習諸葛亮八陣孫子九地及結営向背 一同五年正六位下吉備真備為西海道節度使 従五位下丹治真人土作 佑伯宿禰美濃麿為副

云[illegible]白[illegible]村[illegible]寺[illegible]亀山[illegible]陵と云

行[illegible]一説後亀山帝陵[illegible]国[illegible]村[illegible]天皇[illegible]

社山上[illegible]天[illegible]陵と云[illegible]国[illegible]

大古村[illegible]亀山法皇陵と云[illegible]国[illegible]浦

土御門帝[illegible]土[illegible]村[illegible]帝陵[illegible]国中

△節刀 軍防令義解曰凡大将出征皆授節刀 謂凡節者以牛尾為之使者所擁也今以刀代之故曰節刀 雑ニ名[illegible]相異ニ其辞 用処ノ者ハ一ナリ

淡路[illegible]王[illegible]廃帝[illegible]国[illegible]村[illegible]帝[illegible]

其[illegible]向[illegible]帝[illegible]

[illegible]云[illegible]書[illegible]語

[illegible]

右[illegible]八兼[illegible]七十四[illegible]十月[illegible]馬具之助八新[illegible]三百[illegible]本胡細馬集[illegible]

近集秘要録抄記

當将軍家御[illegible]せし事[illegible]初[illegible]四海[illegible]風[illegible]之事

了天下[illegible]徳川家重公八[illegible]九代[illegible]将軍

紀州吉宗公[illegible]長[illegible]紀州[illegible]長福[illegible]宝[illegible]

紀州[illegible]家重公[illegible]

仕年[illegible]天下[illegible]

[illegible]

[illegible]将軍吉宗公[illegible]

[illegible]

[illegible]

上意と申ニ付ハ不及沙汰、於御前口宣案ニ付而ハ上意の代り御祠代之名代とし
て大岡越前守上意を承りて申渡ス事と云、口御祝儀之節先年出羽守
大岡出雲守を御祠代りと云ス　家重公御病身ニ付而ハ出雲守を御成之節
上ハ倍当番定式、御供申上ル道ニ付而も御鷹部ニ而も沙汰ニ不及
御祝儀之時ニ去年四月上野御成之節ハ御参詣之内三ケ
所上野御参ニ三ケ所芝御成之節ハ外様御大名衆一ケ所御参之節一ケ所上ル
程ハ二ケ所大通口御沙汰也、此年も去ル三月廿日夜口御儀初と云所
口三郎兵衛口出羽守御側口通御近習御取立口出羽守被召出御沙汰
大奥之方御沙汰之由　家重公御出羽守ニ被仰付御沙汰ニ付
御老中若年寄衆ハ御沙汰口承り御沙汰の口を承り御立ニ付御沙汰
を存候処、右御沙汰口中八日御年寄口三郎兵衛御達有之候処

一 至心院殿御事ハ御家御沙汰ニ付も御沙汰有之御座候ニ付ても
一 至心院殿御實母ニ付　大岡出雲守公御母堂ニ御座ニ付ハ八代御
口御事也　家重公御誕生被成候比御母堂御下向之節口御供上ル事
有之候処、御実母御沙汰ニ付、御沙汰有之口口御沙汰也
元文二年　御代替之御沙汰口御内の大岡出雲守ニ付口
口御沙汰被仰付候口御沙汰ニ付、右之御沙汰之　家重公御側被仰付多く
御中之御沙汰口御母堂口御沙汰口御沙汰之口
口御沙汰之御事も口大奥の事口御沙汰之口御沙汰
其の御沙汰の御沙汰之事　御三家方ニ而も今年正月
先御沙汰被仰付口御沙汰ニ付二丸御沙汰也

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鷺宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

一田中休悦か人見ニ語る事を　川俣田中休悦と云ハ町ニ
借屋立て四五尺場を迄も出し兵蔵と云者有て旧人云ける老以て
子共川端ニ在りけるハ古来ゟ二丈近くに大なる岩有りける是は休悦か宮
人近辺の物も古来ゟ知る所ハ祖先ゟ流れし所ギギウ
と云魚を浮らう是を古来ゟ以て池とせし山へ掛りけれハ繰
川迄も網ハ無き一羽かくてなしても行らけ所存扨人もえ子休悦も
まて二百年余の頃と川端の方へ古来ゟ依と仲間の雅子をとえ聞て
其代りゟとはギギウを網の目に掛るりて説ハ扨人出て来りて人
とハ網ニ中ニギギウを魚掛りて扨人ハちゝとも是ハ水中ニ住
魚山中ニ有る網ニ居りしハ名を云と思ふ事ハ人ともり成ハ五疵
今の古文書をもて陰陽師を頼みて来て居るなりハト者ニ頼て曰ゆるハ

山神の怒ニふれて若者ニ掟ありハ村中ニ人残らずギギウを神ニ
祭りと申人ことなき世にありハ陰陽師の古事を信じて其の由を承ニ
つらひギギウを初捕りし人其子ニ至るまで末を頼み永年を断
ちハギギウ左衛門と名付けりける陰陽師ハ陽成を辛と申けれハ卯ニ語
宮ニ申氏子共名ニ人々皆ハ是を信じて右依てハ村中人残らず
との神楽を申して人々ちらさずて我も々々年を子とも人の命を
思ひて人々の命に保て以て命を永久にハ古方ゟ家々を申て
清水川の村中休悦云ふ是を申して又は後ニ村々の祈ハ道
にの若者ら祭り出て以て世村内にハ又廻り何にも一人の
老母を弄して保ちけれハ家ニ在て人依りて保の中の休悦ニ申て毋ニ
ふけりて扨て一命を上ケ申して下りけるハ人々ちゝ庭いかニも命をまま

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1
ガラス使用

国立国会図書館　鷺宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鷺宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

堂桂昌院一位之尼君御執奏勅定法然上人て円光大師とこそ
一向宗の祖師上人をも見真大師号勅許有て表揚し侍し
上意なし村上天皇の御時ハ空也上人ニ通ちの御ハ公家方多く
退こそ有れ八幡の威光有なとしれハ東本願寺より是を出し
難有御勅し法の為に思ふ事こそ大事ハ有かたかれ御本願の
再興なし鳥居をも取し上ハ御四年ヨリ取らしむ地の多く
古記ニ本尊をも御出現の如しと明らかに鳥居に附せらるゝ人々
皆ハ本寺の玉もちを出世本の事を御論し化学のこと
其事共ハ無事に至る一宗を尤は有て至一と言うし世評は能
なとて御外命もし迄て手有りて世安人を立てし後て今十人の摩
公也金を流れ御宝をもちて今ハ世ハ今も流れて今は執る今も

石仏か其の名所の外にも有て及ばず歴々の處ニ江戸内人
一の寺並の仏堂を建立して八十五ヶ所をとし国々ニ寄せも今も
先ニ在て也と仏ヲ信心の人ハ京都ゟ見物そして八所々も有之
其通りの為ニ後れ侍ふゆかしく加持して其七ヶ所ニ其上今ま
寺在る也よし同所に仏をつかはして今も既ニ八カ所を
上る事に一論の者ありて鳥居跡ニて之四国へ入る古人
手洞ゟ鳥居へまいりの仏ニ京都より参し今も古寺
をはじめ仏のとりて今も寺有る跡へ行て八百ヶ所の近を鳥居あり
其ニ流れり鳥居ハ八百万ニ入てを是ニ志る寺跡の所
八坂八郎名山霊山黒谷ニ東西の二本の寺を跡の名人
野良ニ堂々の文字をいかにも其上所中の今と行をかけて

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1
ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鷺宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

一 河津三郎祐泰[illegible]の[illegible]
曽我[illegible]神田[illegible]
祐親の娘[illegible]河津三郎[illegible]
祐泰か[illegible]祖父[illegible]祐泰か[illegible]
[illegible]
[illegible]
御[illegible]
[illegible]
[illegible]
一 [illegible]
[illegible]御[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]御[illegible]
[illegible]御城[illegible]
[illegible]御[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
一 [illegible]
[illegible]御[illegible]
[illegible]

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鷺宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鷲宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鷺宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鷺宿雑記 238-1

ガラス使用

238
577
1

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

鷺宿雜記

238
577
1

国立国会図書館　　鷺宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鷺宿雑記 238-1

ガラス使用

国立国会図書館　鷺宿雑記 238-1

ガラス使用

天保八酉年七月廿日上　七月十二日　松平周防守

七月十九日

松平周防守

右御届有之為推使当方も無[illegible]因心得人浦賀へ差越候
大種使屋敷二家初而罷出候ニ付御届申上候人当人名
岩田屋源右衛門殿方にて右川蔵吉様御呈之御役
名前申立有之
　〔割注〕当月御届ニ相成候ニ付右郡代ゟ使者ニ而先月御届有之候[illegible]

一 石川浦賀表郡内今日御名前御申立ニ相成候事船附人合渡候

　　　　　　取名　八大兵
　　　　　　二番　久蔵

　　　　　　摂津兵庫

大久保甲斐守様御手四月八日
米千九百俵八斗石余
出来高二百七十石四百廿七石余差出し
　　　　　　有金八百廿七両八分余

大船四百石積内九百八十人余
廻船同四十同五百四十七石余
右米三千九百俵余石余出来高入候
九拾七俵余方俵　但金拾両ニ付米俵
但金メ五十八俵七石余
御金有之ニ付八俵八百廿両余石余御座候
右之人て伊東摂津守様ニ御預ケ御知らせ有之候
右書付申ノ年ニ而新地ニ而御出し二付
より拙者ニ而御米御座候に付浦賀ニ而
御取り之御米御座候に付而其儀御座候
　〔割注〕兼而御届之同様御座候

一
太田白

御用松平周防守之儀ニ付大判浦賀松平備前守兵庫

一朝鮮の竹信ハ筆
争アリ松松松
素ノ大船アリ竹
おなり所多
ツヨリ海岸
岩石多ク出
船の竹物ハ甚多
地なりと許の
竹ニテ成アリ
前ノ日本日記
と松高ノ六蔵ニ
尋ネラレ人名
ナシや

右ハ鶯ノ竹信ハ渡海船一件ニ付申上ケ大ニ鶯ノ為ニ申上候
岩科ニ於テ大竹作右衛門別宗子ト書テ渡海奥溪
守ナリトソ寛文元禄ニ渡朝鮮ニ渡ル此時ニ書
渡海停止ナリ此七ト物成ニ有之然ル三三国渡海禁ハ
元ヨリ制禁ニテ今度大竹ノ者モ同罪ト渡海
致ス者ハ勿論ナリ廻船ニ海上ニ於テ三ヶ国ヘ舟ニ不
出会候ハ申開キ無之ニ付先ツ其船ヲ通シ候テ
以来ハ〆竹者ハ中出ス渡海ノ筆通リノ〆
大竹ハ岩科ニ而成長致シ候ヲ地頭浦方村々ヘも
度々御触ニ付当国松江ニ渡ニテ物成ニ越
之有ル旨也
右之通ノ事ニ御座候

右竹信一件ハ其ノ仙石家浅野ト御両家一般ニ風聞ナリシカ
只大目附へも御届ナシ

安斎善右衛門書抜 是ハ松高ノ物書ニテ其下部ナリシ安斎善右衛門ニ書セ多ク其下部ノ事ニ付テハ三方ニ有之

一 中臣祓二月上申日氏院部又ハ鑒也ト云ハ梅ヲ煮シ紙雑ヲ作リ然ル後ニ入行事官上ノ前ニ至リ祓殿ニ上リ御戒事ナシ旅ノリ右ノ肩ト腰二度ツ梅ヲ振ル甚同行ノ官中臣祓ヲ読

一 夏土用ニハメクリヲ食シ疫病ヲ除ク 京俗古代ヨリ行 獲采ノ称 山ノ芋ノ葉ノ青汁ニテコチ煉テ松屋氏小刀ニテ削リ綿ノ如ク成ルヲ一ツニコチ交テ丸シテゴク陽リ味噌汁ニ煮ル茄子染ヲ加ヘ食スルナシ 其ノ程ハメクリ初中後三度用ヲ行ナリ

一 竈神三宝荒神仏ヨリ出候佛家ニテ荒神ト云ハ竈ニ渉ス

ト云リ 真俗仏事編ニアリ ヘツイ殿ト云古来ノ名 清少納言枕ノ草紙ニヘツイト
アリ 埜秘抄ニ竈神トアリ ヘツイ殿ノヘツイハ異書ニ[illegible]
神ト称スルモヘツイト云 内裡ノ内膳司御竈ノ神三坐 平野ノ神 忌火ノ神 庭火ノ神
三神ヲ祀テ御竈ノ神ト云ヿ

一 挟箱 上代ハ袋ヲ従者ニ持カセテ衣服調度ノ物ヲ入 雄略天皇十四年
甲午朔ノ記ニ嚢(フクロカツキ)者ト云見タリ 古画ニモ往々有シ夫ヲ名付テ上
差袋ト云 其后豊臣ニナシ破レサル為ニ竪固ニスルヲ以テ俗称ス
慶長ノ比ヨリ此袋ヲ廃シテ竹ヲ割カケテ衣服ヲ挿テ持セシヨリ
挟竹ト云 慶長ノ比津田長門守作 割竹ニハサミタルナリ 其後竹ヲ止テ箱ニ作リテ挟箱ト
セシヨリ備事ニシテ当今ノ如ク成タリ 寛永ノ末江戸ニテ出来ルト云

一 左迁七種粥事 一 居五ニモカイサマニ[illegible]ニ飯ヲ[illegible]ニスエル。

三 膳ニ折箸ヲ附 四 羅状硯水ニ其乳ヲ移メ提子ノ口ヨリツグ
五 コノシロノ鰭ヲ杉ノ組板ノモナカニシテ切ル 六 陶盃ノ間ニ
七 車ニ倒(サカシマ)ニ乗ル 右或抄ニ書ス 今時切腹死罪ノ礼世用ニ
迎クルハ其古事ノ法礼ニナラヒタルナルヘシ

一 陸奥ノ凧夫[illegible] ヱゾノ通事シ 慶之五年ノ紀 今代ニ迄テ上古ハ奥
州ノ人外国ノ如クナリシカハ詞モ今ノ世ノ如ク通セズ依テ通事
命セラレシナリ [illegible]

一 鎮守府大宰府 此ハ凧夫ニ備 南ハ唐国渤海新羅百済
等要威ニ備シ 天平宝字六年[illegible]甲申日一千領ヲ造テ以鎮国衛府ニ貯

乗勘杉ニ 福富双帋ハ たしかより画 巻物にはなる [illegible]
一 福富双帋サクスル 高向(タカムコ)秀武ト云ル老人ニカリケルカ神ニ祈テ
神事ニテ屁(ヒル)ヲ放コヲ巧ニシテ世ニモテハヤサレ富タリシヲ隣ノ福富ト

云〻爾其ニテヨシテ貴家ニメサレシニ屁ヲヒリ〳〵コナヒテ屋ヲヒリ
出シテ才聯セラレシヿヲ画ノメリ其一詞書ニ屁ヲ放ラサニ云ルト云
鶯ノ羽ヲ呈シ候ニノ花ニ交テ香ハ屁出テ音止ラス試メルヿ
セトソ　室町ノ比両国ヘ屁ヒリ男見世ヲ出シ色〻曲屁ヲヒリ又五色屁ヲヒル
階子屁連玉屁書屁糾書ノコトシ森訝カクタリキ

一 皇子降誕ノ時虎ノ皮ヲ御傍ニ出行スハ是ニテイルトニ〻
虎猛獣ナレハ邪魅ヲ退除スルナリ

一 中臣祓妖邪悉脱　鄙聊依国史云ノ九十二漢紀日履中天皇
六年乙巳三月十五日令ニ伊豫部真人ニ苅(カリス)ニ大和国稽田野ニ有ニ六
歸之梳ニ卒然ニ死ス卒有ニ一女婦人ニ招ニ真人ニ不覚依ニ其色容
官卒如ニ常盍有ニ一老人者ニ捕ニ中臣祓ニ官卒ニ給テ如ニ解醒ナリ
真人脱氣而帰

一 白石先生新井筑後守源君美(キンヨシ)父故土屋民部少輔家人ナリ二子
相馬家養子ナル白石土屋民部少輔父子浮子守殿代浪人ハ
堀田家ヘ出仕シ家宣公甲府ニ於テ召出シ後ニ一度山林ニ一段ノ
足ハ仕一度ノ王信白石子長傳說此御沙汰ニ而ニ之其ニ不
老子之元来篤孝文學井其云上列ノ義後代新井ト地名ヲ
称スヤ新田家ノ支流ノ事ハ白石家牒ニ記セ列ス

一 西本府亜馬(ハルニヤ)相手人云天化ノ言馬ハルニヤト日本ニ之ヲ云ハ言有得
中台屋下ニ候テハルニヤ馬渡来其人ヲケイウルヲ内々ニ而テ乗
方侍按ス安永七年長崎ヨリ拓押長ノ守ヘ来府ノ所役ハ
ニヤ馬ニ之ヲ成セラレ両来ニモ五尺来長五尺五寸
　和田倉御厩ニ而至　内桜田御厩ニ牧ニ来論
　諸部ニ之五ヲ列シ　諸部ニ之九ヲ列リ渡ル
里居毛立六寸来長五尺五寸三分
　乗方ニ仕ヒ
相手流ニ筆ヒ先ニ之ニ其ヲケイウルヘ入シ之ニ筆ヲ家ヲ傳ス

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

志ヲ咽喉ノ中央ニ当テ（男ハ咽喉ノゴヽニ当）指ノ二節一寸ニ近シ当ル所ハ仮点シ其ヨリ天骨ノ左右ヘ一寸開一点ツヽ灸ス大髄ノ左右ヘモ灸スルモヨシ 戸田勘介伝授ノ法

一 瘡疾鬱肉ヲ二振シ後ニ含ミス必疵跡ヲ令治ス鬱肉ハ女人血症ニ妙アリ肉ナキニハ肉骨ヲ煮テ其ニメ嘗テ日効シ

一 一休和尚手孔如云詩の詩 五言絶句

改年尚者度。不可有休期。衝於詩如此。疾風永日時。

華一反韻字ヲ統無失シ 頼庵

一 仙花林子平歌曰人

ヱルハ悪ルヽ去ルヽ枝不切一、今モ切レト残ラモ切

一 三種神器 八尺瓊（ヤサカニ） 白銅鏡（マスミ） 十握剣（トツカ）、日本紀中哀天皇

八年正月己卯朔紀筑紫ノ県主祖五十迹手（イツテ）天皇之行ヲ聞五百枝ノ賢木ヲ抜取船之舳艫ニ立テ上枝ニハ八尺瓊ヲ掛中枝ニハ白銅鏡ヲ掛下枝ニハ十握ノ剣ヲ掛穴門引島而献之天照大神ノ神勅ト作リナシタルナリ

一 八幡宮初ニハ八幡大神宮ト唱ノ後大菩薩ト唱改タリ 聖徳太子三社託宣ヲ作文辞仏ノ口気アリ神語ニアラス 安斎

一 天馬史記祠ニ太一ヲ泉ニミ又嘗得タリ神馬渥洼水中ニ復次為ニ太一之哥ヲ哥曲曰太一貢兮天馬下霑赤汗兮沫流ニ

正義曰大一北極大星也 大星ノ号此ニ見ル

一 神国神道 上古ノ国史正書ニ神国ノ称無シ 神功紀ニ東有神国ヲ謂ニ日本ヲ是ハ新羅王日本ニ在テ神国ト云タル詞ゝ神ノ字神祇神道ナトノ神トハ意味異ナリ

日本ニ神国ト云称アルヲ聞傳テ神ト云タルニアラス

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1
ガラス使用

中古以来何人ニ王道ノ二字ヲ守ルコヲ教トノ神道ト云名目ヲ造リ出スシ夫ヨリ〆神国ト云称ヲ云出セシ 古書ニ神祇道ト云コハアリ是ハ亜祝ノ神ヲ祭ル道ヲ云ヘシ善ヲ善トシ悪ヲ悪トス道ハ無シ尻天下能治ホタ儒佛アラザル代ニ古代神道ヲ云シコ不見

一 安斎云神書ハ日本紀 古事記 古語拾遺 中臣祓ホハ正シキ古書ニ可信 旧事紀 伊勢ノ五部書等偽作ナリ 其外ホ書ハ仏法ヲ交ヘテ作タルシ儒道ヲ以テ作リタルアリ陰陽道ヲ交タルシ三道ヲ兼テ作リタルアリ皆白梅モノ也信スヘカラス

一 高天原 天上ヲサシテ云ニハアラス大和国葛城郡高天山ニ天野アリ 天香山モ大和国十市郡ニアリ 高天原天香山ノ物ヲ取テ用ラレシ也天照大神ノ皇居ハ高天山高天野ノ内ナルヘシ

一 諱 生ル人ニハ名ト云 死セルニハ諱ト云 然ニ誤テ貴人ニハイマダ死セザルニ諱ト云人アリ 誤ナリ

一 餝釼（カザリタチ） 廣橋家傳来藤原房前ノ嫡男真楯公ノ釼 右大臣正二位 嵐樹ト云 右廣橋家ニ於テ拝見ス 安斎云ル二依ノ其ノ釼ニテ又釼ナレナモ後ニテ其ヲ写シ又ノ形象ヲ備タル計リシヤスリ同モアリ 又鉄環モアレシ 安斎按ニ儀刀シ儀刀外十モカ子ニテ作リタルシ見セカケハカリ威儀ニ備ルヲ儀刀ト云モノ也 文官ノ人勅授帯釼ノ宣旨ヲ蒙リテ佩シナモカ子ノ太刀ヲ真釼ノ如クニ餝ル故餝釼ト云ヘシ 餝釼今日餝釼古物大略木也トアリ木刀ヲモ用タルト見ヘタリ 十モカ子ノ刀ニテモ木刀 文官ノ儀刀ニナモ後木刀ヲ不用真釼環又備リタルヲ用モ 餝釼ノ彫文ヲ具スルニ是餝

ノ名アレ氏真ノ鐫鈒ニアラズ儀カヲ以テ真ノ如クスル故鐫鏤ト
云フ人イマダ詳ニセザルナリ
梅ニ鐫鈒ノ真物図セシム氏其真ヲ見ザリキ文政ノ末加藤
家臣戸田勘介ガ松前ヨリ偕タル鐫鏤ヲ　老公ニ献ス其文彫
古式謬ラザルヘシ其鞘柄ヲ集古後集ニ出ザル事旨ヘシモ似ハ
実鉄ヘシ常ノモノカ子ニテ打ノ近タルニテ又モナシ鉄弓ノ如クシ
公コレヲ不用ニアリ　公ニ乞テ相頒セシト願タルニ何ニ致ストヿ同年ヲ
冬ニ云是ヲ額ニ作リ北夷ヨリ出タル事ヲ託シテ神社ニ納度ト
云則免許ス是ヲ掲リ又可惜文政ノ器ニ煙失セリ甚以遺
之事達武ノ物ニアラズ保之平治中ノ鐫鈒ナリ恐クハ義経
朝臣北夷ヘワタリシヲリノ遺物ナラム

一三種神器ノ一神璽安斎翁云天子ノ御印ナル事也其御ニ下ノ文字代々ニ
ミテ改ルヿナク天皇御璽トアリ此御璽ハ神代ヨリ傳タル物ニハアラズ
孝徳天皇以来ノ物ニテ有事也神代ノ物ニテナケレ氏ミヲミテ神字ヲ
當テ唱ルナリ御璽ハ重キ宝ナル故鏡劔ニ傍テ置ルヨリ三種ノ神
器ト云モ習ハセシナル事也曲玉ヲ神璽ト云説用難シ
璽ニ神璽ト云名目ハ己ニ後代ノ称ナル事也玉ヲ以テ宝トスルナリ
後代ニ至リ其曲玉ニ天皇御璽ノ文字ヲ彫刻セシナル事也三種
神器ト云号後代ノ称謂ナル事也安斎翁曲玉ヲ神璽ト云説
用ヒタル事也ト云ハ強言也　集御梅ニ神璽ヲ何トサレテ云ヿハ知サレ氏松高
力曲玉ニ天皇御璽ノ文字ヲ彫刻セシナル事也ト云
ヘルモ変難シ天皇御璽ノ御下ハ何ヲ方ミテモ有事也曲玉ノ象ニ其作彫タ
ル物ニハ省カラスサレハ松高翁ノ説ニテ信カタシ安斎翁ノ孝徳天皇以来ノ
・物ト強テ斥タル松モナケレハ是又信シカタシテカ天皇御璽ノ御下ヲ真物ニテ
見タルニハ比較甚外千年内外ノ神社佛物ニ納傳古文書ニハマヽ見ニアリ

一関東 坂東 関東ハ近江国會坂関ヨリ東ヲサシテ云ナリ 坂東ハ上野ト信濃トノ界ノ碓井ヨリ東ヲサシテ云ナリ
坂東八州ハ武蔵 相模 安房 上総 下総 常陸 上野 下野 是ナリ
小田原北條氏ノ時常陸ハ佐竹氏ノ采地ナレハ北條領ニナケレハ
常陸ヲ除キ伊豆ヲ加ヘ八州トス関八州ト云名目ハ坂東八州也
東鑑ニ云関東関西ハ足柄ヲ界トシ関東廿八ヶ国関西卅八ヶ国建仁三年
之従之 五畿内ニ東海東山ヲ加ヘテ廿八ヶ国 北陸山陰山陽南
海西海ヲ合テ関西三十八ヶ国ナリ

一折笞 硯 箱 冊 輪 冠 経巻ヲ居ル臺也 俗ニ只折敷ト云 折敷ヲニステ作
ル 又折宮ト云 此数臺手アリ 重ハ俗ニ云ナリ 吉事ニ半敷 凶事ニ童敷ヲ
用ユ 無尾 今公家衛 経冊ヲ居テ進上ノ寸重敷用ラルヽナリ

一漢音 唐音 持統天皇五年九月己巳朔申賜音博士大唐
続守言 薩弘恪 書博士百済末士善信 銀人二十両ト見タリ 此年
唐ノ中宗ノ嗣聖八年ニ当レリ 是本朝音博士ノ官 唐人続守ノ
言 薩弘恪ヲ召置テ唐音ヲ教授セシム 漢音是也 漢唐共ニ
代ノ音韻ハ大ニ異ナラス 其音ヲ傳テ本朝ニ傳リ今ノ清朝音ハ雜
韃音ノ交リタル訛音也 全清ニ至リ漢唐ノ音異訛セシナルヘシ 今
ノ清音ヲ王音ト云 濁タル儒長崎ニテ華音ト号シ習フ大ニ誤
レルナリ 但来ニ漢音ハ菅音 呉音ハ江音ニテ菅家江家異音
ヲ傳ト云ハ推量ノ妄説ナリ 安斎

一今様 拾玉集
花 手のやよいのはつのよ四月廿日へを又度せハ花はかりさかりの
うらこのこをもとまるへくのかりけれ
歌 花梅も皇かり君かもかあるらし多くの有のすゝめなかそ
あらこされ名のりして

月　秋のよる月ハ名にしおふ半ばなりけりいかが世にけり十五夜の月
なけのうつりとてこれを云なり

雪　冬の夜ごとの雪ありけりちりぬる山路にふる雪のしらぬ
あとハつもるも雪ハおとひやうてをふる云なり

前大僧正慈円拾玉集

一　山ざとハかなしき庵を住はてゝ人はちかくも見ぬはかなれけり

一　祓　中臣祓ハ吉田家よりよむ三祭也中臣祓ハ百座祓也是を云
万度五千度抔ハ佛説ノ千部万部雷佛百万遍ニ効ヒテ一
実祓ハ一度ニテ可済也　安斎　集翁ノ問答ニテ貞丈雑記印ニ記ス　詳なるを考へ給へ

三種太祓ハ儒道より出易経を以て作る
六根清浄祓ハ佛説より出佛説六根の教識なり

一　安斎曰神代文字なし人代ニ至テも神武天皇以前ハ未知ニ
文字なし上古ノ事ハ記シ伝ル書なし応神ノ朝文字始テワタリ
我ニ文字ニ熟シテ古事記著述スル程ノ事ニハ至ヘカラス神祇ノ
事ナド旧事記ニ伝ルハ仁徳天皇御宇以後ノ事ニ係リ佛神習合ノ旧儒
佛習合ノ書後代ノ作也

一　伊勢太神宮秘書　太神宮本記　宝基本記　一阿波
羅波記　御鎮座次第記　飛鳥本記　御鎮座本紀　太田命訓伝記　倭姫命世記
倭姫命世記ト云以上五部之書　神名秘書二巻　神名蜜録
神祇本源十五巻　以上二書ヲ五部書ニ合七部書ト号
心御柱記　古老口実伝　永正記　度會文[illegible]年中行事　度會
氏系図　以上五書ヲ合十二部ノ書ト号皆疑書也　神皇
実録　伊勢風土記　大成経神祇啓白祓　御鎮座本録

一　右等佛ニ依神代ノ物ニ無ク偽書也

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1
ガラス使用

一神道ハ神祇ヲ念ル所ナレ正直ヲ以テ敬ヲ教ハ後代ノ僻ゥナリ
神道ニ敬ナシ敬ナキヲ以ヲトス敬ヲ教ハ佛儒ノ道ナリ

一奥式長サ五寸幅三寸ハカリ中ヲ中ニシ鮫皮ニテ張表ニ金銅
ニテ作リ白金銅ニテ日月ノ如シ是古代今ノ行幸ニ奉ル事ヲ以テ目銀ヲ
サル笏ナリ先ニハアラス裁シ銅ハ象皮石帳奥シ梅ニ戒トスヘシ

一凋布メックリツキヌノシ

一南天性大寒シ毒ヲ解ス夏日食物ヲ野置上ニ置又下ニ葉
ヲ布食物腐ラス葉ヲ蒸口中ニ含又粉末ヲ傳シテ口
中痛ヲ去ル無葉ヲ以テ身ヲ打行ヲサル

一朝臣 天平宝字三年十二月丁丑授正六位上廣宮野ニ外従五位下
無位菅原朝臣姉カ
右無位無官ニテモ朝臣ノ書ニ一十讀没ナリ

朝臣アニテ若布真人等地下ニテ無位無官有ル官
四位上朝臣ト云後代の誤シ

一御(オン)オヲンノ略大(オヲン)尊敬シテ大字ノ如ク読ムシ 天皇大ナルト云意ニハ
ニハイニシ忌シ荷シ物忌憚議ヲ憚ノ意ナリ後世ハ
人ヲ敬スルニ御ノ字ヲ用スルコトトナレリ

一連銭アシモヲ虎毛(トラゲ)ノ馬ト云斑痕ノ意シ

一小笠原備礼小笠原貞宗家祖唐僧清拙ト議シテ決礼
ヲ定ム是ハ礼ヲ定シ後代天下之ヲ用

一装束夏冬シ 自四月一日至九月晦日 夏服用之
自十月一日至三月晦日 冬服用之
右掌秘抄ノ著御引直衣恒例臨時ノ二冬
是先年後明院様十七回御忌ニ前宇国公拙(祖父)物シ紫

御着座ノ時御衣冠御装束方ニ而仕ニ候九月十日
風ニ而御逝去ノ御袍其上ニ丸ニ如ニ字所外従後ニ而同
様ノ冬服召ニ有之入交ヤ当御逝去ノ節ヲ得タリキ
一 切支丹寺尊寺天主 寺僧 吉利支丹（キリステヤン） 細吉公ノ吉ノ字ニ憚リ
切支丹ト書天主教ハ其ノ仏経ニ天主ト申ス者ノ名ニ
寺云々城郭櫓五重四重三重七重二重アリ 殿堂ニモ
一番上ノ重中ニ天主ヲ安置ス然ル之今天守ト書天主ヲ
安鎮スルノ処ハ其建法尋常ナラス此重ニハ人容易ニ上ル
ヘカラス神ノ密アル故戒厳メ置ル故ニ天守番
モ天守ノ重ニハ妄ニ不行 討佛法必勝ノ法アリ 故ニ天
主ヲ祭ナルカ 幾重ニテモ天守ヲ安鎮セサルハ只幾重ヤクラト云ヘシ

唐本五雑俎ニ天主教ノ事アリ和板ハ禁忌ニ載刻セズ云々
仏家ニ蛇形弁財天頭ハ美女ニメ身ハ蛇ノ像ルニ是五雑俎ノ天主ニ
同シ日本国中切支丹御制禁ニナリニ其法ハ絶タレ共尊寺ノ
像ハ残リシヤ是ハ長崎ノ踏絵ノ像可相探
一 誓文状 貞永式目 起請文
梵日本國中六十余州大小神祇（大小神祇ハ延喜式神明帳大社小社之）殊ニハ伊豆
箱根両所権現三嶋大明神八幡大菩薩天満大自在天
神（天神ナリ）部類眷属神罰冥罰各可罷蒙者也
右ノ誓文ハ隆家ニテ貞永元年此條泰時カ評定所ニテ評飛
定刻ノ為ニ貞永式目ヲ撰ニテ評定文内ニ私曲ステニキ誓文
シ是皆鎌倉通国ノ名ニ高キ神社ヲ崇スモ国中ノ神ニニ

初言之無之 御当代ニ及テモ此初言文ヲ用テ其当国中ノ神
名ヲ不加ハ只例ニ依ノミ

一 大嘗會ノ御冠 玉冠ハ應神天皇ノ御冠ニ 揚貝御礼服 内君意ニアリ
後三条院様御頭ニ此御古冠メデタク合セ給ヒタリケルト
ナリ此コヲ常ニ御自讃ありしとぞ 古代大嘗會玉冠礼服

一 懐妊ノ子痫 無膽ヲ用即効アリ 妊婦月数重リテ俄ニ気
絶シ倒レ眼ヲ見開瞳子ヲツリ上ケ歯ヲ嚙ミ舌ヲ出シ手
足ヲ拝振ヒ動ニ及ナリ人事ヲ不知癲癇病ノ如クナルヲ
子痫ト云ナリ早速正真無膽ヲ水ニテ濃トキテ口中ヘ入
ヘシ度ニ入腹中

一 尸カバネ 姓氏ニ自書 源頼信伴宿祢清原真人ト書ヘシ

一 大猷院様ノ御代より御城中不用ノ御座敷ハ畳ヲ揚テ積重
ネ置シ御畳衆其表ニ升拖クラヘシテ遊ヒシニ度々ニ及ヒ
御畳モ破損シヽトカヤ 上ノ耳ニ達シ以来畳ヲ表ニ重
ネ置ヘシ拖クラヘシテモ破レヌ様ニナストト御意ありしとぞ 其以後
御旗本衆人喰犬ノ如ク我儘田夫野人ノ如クシ公直ニ
猜シケル是ニテ戦場御用ニモ立武気ヲ仕ニナリシトテニ故ニ
畳外ニ措務者ヲ諸拾ニスルニ御沙汰無シ御初段ヨリノ御定法ニニ

一 錦繡 織物文ヲ織タル錦綾ノ類 三重織物ハ綾上ノ織文ニタルナリ 又綾ヲ地文ト云 織ヲ上文ト云
織色 染糸ニテ織タルヲ 又板引 ※ノ板ニ張乞織若ナク候ヲ
引 引倍文 経緯ニ細コリトテ漆塗ノ板ニ引張テ引剥タルナリ光
了剥 アリテ硝子ノ如シ
打絹 砧ニテ打テ艶ナル絹 平絹 無紋ノ 生絹 キヌ スゞシノ絹 練サル絹

捲纈 皆絞 絞タル絹ヘ、シボラ後 シボラヨセ織タルナリ 縮緬トモ云
纐纈トモ 絞染 經糸生 緯糸練糸ニテ織 俗ノシメトモ云 シボラノ練ヌキシボラヲ伸タルヲノシメ子リヌキト云 詞言ナリ シボラノシメ
浮文綾 又名浮織綾 糸ヲ浮テ文ヲ織出ス、固文綾 糸ヲウケズ沈メ織タルモノ
葉二人ノ紋紗 透紗紗 顕紋紗アリ 透紗紗ハ地ヲ固織ニ
シテ文ヲ透通織シ顕文紗ハ地ヲ透通文固織シ地透織
ヲ紗地ト云
蜀江錦 蜀ノ国巴江ニテ糸ヲ晒シタル錦ニ金糸ヲ不用黄糸ニ以テ織ル

一五ツ衣 キヌ 後代ノ名目 上代ハ五ニ不限 袙 アコメ 袙ハ衵ニ玉篇 近身衣 唐衣ナドノ下着ニ用ル所其衣ニ
女郎ノ袙ハ肌ニ不着 肌ニハ白小袖ヲ着ルニ 小袖トハ丸ヘ袖ヲ云ナリ 小袖ノ上ニ袙
ヲ着ス 袙男女共ニ着ス 但男ノ着スルハ裁縫違アリ皆四角ナル
広袖也 又俗称ニ鐘会八幡又社家五ツ衣ヲ着スモノ単ニ領ヲ重子 其ニテ十領ナリ 其上ニ唐衣ニ領アリ 俗ニ十二単ト云ナリ 単衣十二

一 當色 ニキ 君ヨリ例シ賜又許 係スルノ号 役官相当ノ色ト云ナルヘシ
安斎為公物ヲ當色ト云 石清水臨時祭 舞人唐鞍ヲ出シ 隨之是當色ノ類シ

一 総着 躬ノツメケト着クシテ不長衣ヘ衫着氏書歟

一 於云五ツ衣ハ袙本名也 袙五ツ重子着ル故五ツキヌト云 女房ノ
装束十二一重ト云テ裾ニハアラズ 或裾ト云氏 左様ニ裾ト云カラ
ズミニ五ツ衣ト云物カイドリニシタル廣袖也 女ノ装束ハキヌト
云シ道服ノ招ナルハ上ノキヌト云 又唐キヌ氏云 腰ギリノ物也カケ
帯領ノ服ノ通リ之物也 服アケト云衣ハ裾迄馬乗ノヤウニ
服アケテアル物也 長キ五ツ衣ノ小妻ノ長キ也 袖ノユキ短
装束ノ身ハ髪ハニ入程ニヒテ裳ノ裾ヘ長ク引クナリ 唐キヌハ
唐服唐人ノ服ハ短キナリ

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1
ガラス使用

皆単ノ後ニホロヲ捲リタルナリ表裏ノトニ枚ツヽカサネ一幅ノ縫目ノ二テ縫付タルナリ是ヲ五ツ十枚ナリ一ツニ重ネ雁ノ列ニテ一束ニ縫付五ツ衣ノ別ニニナラヌやうニシノメリ

右上衣ノ唐衣ト云ハ常ノ女ノセイダケ位ハ有ヘシ此廣袖袖下一尺七八寸モアリ唐衣ノ裾袖ヨリ二尺バカリアリキサシハ唐衣ノタケモ三尺七八寸四尺モ有ヘシ唐衣常ノ綾ニテラス浮線綾ノ紋ニテ小菱紋ノ如キ一面ニ五色糸ニテ織出シ黄糸紋ヲモ二テ其間ニ色糸ニテ浮織ニシタル唐織ノ紋ノ五ツ衣ノ一番下ナルニ近キ単ヲ袖口帽座ノ外ノ衣ヨリ五六寸出シ紅綾裳ノ花丈ヲ国織ニシタルニモノし

□肩巾(ヒレ)□裙帯(クンタイ/クタイトモ)□裳(クメイ) 共ニ衣女服ニ今世共ニ三ツヲ一ツニ縫合テ一ツニ用

一 癲癇 卒倒病シ發スルモヒキリ試シモ割裂モノアリ此症ニ必アリモ列裂ルモノ千金ヲ投ナ奇薬良薬用ル氏必治ルナラシ常人の発病ノ毛石列裂モ人依靡法治スヘシモサケサル者ハ靡ヲ不用氏治ル事治スヘキこし

一 妬盗ハ畜ニ盗ナリ盗児童乳呑の治ヨリ人目ヲ壊キ食ヲ盗ナ長ニテ女童ノ寂也ヲ奪モ是ヲ不ス盗ナシ犬猫皆共

其天性アリ人ノ多ニメ盗ヲナスニ非ス天下ニ多人多ク餓死スルモ
盗ヲナシ盗モノ富貴ニアリ必多ク富ノ論ヲ免ストニヽ
要ニ盗ニ不限其ヲ其ヲ其ニ依テシ詩ヲ作リ部ヲ大ルモ
好ニ夫レシテモ詩ヲナキ人詩ヲナラス其人ニシテ作ル氏詩ナシ
アル人ノ席上ノ一句モナラス其馬ニ乗弓射ル者ヲ生ス其害ノ業
モ其全風流ヲ好ム殺生ヲ好ム俗ヲ好ム好色ヲ好ム万事モ其ノ欲
性善ニテ好ムハ善悪別アリ 全性ハ善ヲ是一ニ術シテ事業ハ同シ
作用ノ事ナ人ニモナシ韓氏性三品有トニテ其三品ハ作ニ非
ス用ナル也 然ハアニ盗ノミ別ナニハ淋サルヽ 大抵ニ世人ノ疾気ニ
俗ニ肝気トニ肝膽ノ気ノ発動スルニ其肝気トニモ八病シ
年長メ止ハ病治スル也 小児ノ胎毒トニ病アリ胎気ニモ病病

ノ動ヲ発スルハ病毒ノ動発ナル事也 故ニ方位ニ抑肝散等ノ斤
気ヲ治スル方アリ病ナレハコレヲ薬法アリ生レ自ノ病ニ薬方ヲ
以テ治スル事有レヤ治ル方アリ甚非ナリト見
気動揺ニ肝気ノ強キハ素ヨリ病ナル也 シカレ氏人ノ性質ニ依
テ肝気強キアリ肝気更ニナキ人ハ俗ニニモ膽抜馬鹿ノ
動ニテノ憤怒勉強スル心モ有テシキヨヤカナレハ肝気モナキニハシカズ

一 好人養ひ草
今様　別ニ水字曲アリ
やまぶきだどちのやきのやなやちこひひけてえよれるえ

又
おさ之の池あるて氷口とけるや きて宮かおろうる
日ミゟりミてるか

又
蓬莱山に七とせ万年中秋の松の枝に

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1
ガラス使用

露をふし岩ほのそはに気あるに雲山こふのや春来れ　一本此二句なし
やちよ至れる人ハみなもえぬちしあらもれ　一本ツレマキ　一本ちく
ことこむ秋やの名かまつさん　曲節口伝アリ

一水宴曲　集抄ニ前ニ別ニ水宴曲アリト有モノ左ニ一ヒ深草治氏ニテアリ

水のまかれて如月中の八田三笠の山路を過し也やし許由の
いけうる以明世の水の又引来るしくまでとこや出人の
路をたつしハ玄宗(トウリヨウラク)の行のむ月夜のうつるとおもはば
山田の宮の水とか中玉をうつすハ三條なるの西の妻
河辺の前の水ハ深よしつきせしあとをし

新歌

一 しんせう帝をはじめとして由ハせハてとあいまよふ　一本はやく　やまぶきと
うとくし　寺ノ助句也

二 おもふの津の舟のあなし子のまかみをもて去ぬるよし　一本
やまことこうせり　茶酒

三 いざ立りをよの月をさとり水まさるとのおやまむ
やまぶきのゆくとし　一本其助作也　一本ちんて又春すし　ニエゼンニ此ノ作手前物作五郎ノ在ニアリ

四 わらすや春の風なまさなげのあをきもむかふぬでの　一本ちう左ひろ　まのちく
ちく　やまとこうとし
たゞ人する子るもありし是を助春とす　曲節口伝アリ

一 おえ人　宮法印の人のるし

一 月見の詠い古今ハ振袖の女神とも丸顔をか眉に書きてある
御洲月又八月九日より十六才の女子六月十二日より下し

若殿の日野ヶ竹は若人一代なりの考にては居よろしく月々を
定は右吉しと云ふ筈なり 但し一人にかぎり十歳より十七八歳まで
ゆてを読みたるなり
其内六月十六日嘉祥の祝儀にも此例を用ひらる
嘉祥ハ天皇ノ云云下大年ノ祈上如此ニテ六月十六日ニ祝セラルヽ七日吉日也ト年ニ嘉祥ト改ム嘉祥ノ日ヲ定メ祝フ如此ニ成リシ也
云々長明の書家と云ふ物に書きし

一 犬張子 犬の形ちに作りたる箱これは産所に必する箱なし
表衣を一箱に分け是をとぢて後子を入るなり
内入守札 南都法華寺より出す 眉を付る也、
犬とりこは法華寺より渡ししるし尾の細工物といふ
大犬は魔をよけるためなりかしこまる也
重助云々 南都法華寺にて犬張子を調進 人はおそるゝ
第子犬は気かろく生子を達者に育つよかれとの義なり
俗家にて産所を嫌ノ用ゆる事の類也

一 氏姓 姓氏混じたるハ分ノ姓ヲ氏ト云 分ノ氏を姓と云
天智天皇八年石比等賜藤原氏
天武天皇十三年中原真人賜朝臣姓
右朝臣宿祢ハ尸ト云 於て依寄撃

一 九字 抱朴子曰入山宜知六甲秘呪ニ曰臨兵闘者皆陣列前行 居家必用云横書四縦後為五横道家ノ術也道家ハ仙人ノ術ヲ行フ者也 列前行ト云ヲ仏家ニテ列在前ト改メ用之 本ハ仏家ニ無キ事也
・帝加叔又天台上野春遊院又号名仏暇代又信列至吉之寺

宋翔ノ施子義カ
筆林宝鑑ニ三体ヲ引テ人ノ姓名ヲ分タル間ハ列前行シ後流渡ヲ行フ又名山
九畳勢ノ篇ニ
篦工誠法ニアリ皆列在前ト切別ニ行ニ一点ヲ切ル又古法ハウニ
九字ヲ載ス大
公令周公旦ニ
ノ一字方切スルシ其法縦四ヲ切リ後ニ横五ヲ切ト云依テノ法
授ル秘法也ト
アリ其九字
横ハ五ニ、ト横縦交切スルシ口伝ニ依テ画アリ何レ是ナル
前行ノ二字
左前ト作レリ
不可知者ニ頼翔ノ後ニテ後從面ニ九字ノ文字アリ頼
周初伝法ナレ
然ルニ伝説テ
朝若押世博翔列前在トアリ其後原作在一トシ下押サ
改タル九字ヲ
以テ付授ストモ
リキ了還憾ニ思フ 又伝ノ印天台ヨリ受タルハ十鈔印
偽ナリ
鈔形ニ於テ外伝ハ指組立並テ如什ト行扱ス是亦ヲ存シ

一 賢聖障 南殿ノ 所障子 寛平ノ御時始テ画シケル 著聞集 漢朝麒麟
閣ノ功臣ヲ図セラレシタルヲ学ハレタルニヤ云云
馬周 方玄齢 如海 魏徴 自東 諸葛亮 遽伯玉 張良

第五倫 自二 管仲 劉子産 蕭何 自三 伊尹 傅説
太公望 仲山甫 自四 李勣 虞世南 杜預 張華 自西四
羊祜 揚雄 陳寔 班固 自三 桓栄 鄭玄 蘇武
倪寛 自二 董仲舒 文翁 賈誼 叔孫通 自西一 [illegible]也
都テ卅二人ノ像ヲ図シ上色紙形アリ道風朝臣其小傳
ヲ書 道風申文ニ七度ケカシタル由七度書損メ全清
書セシヨシ 然ルニ文亨保ノ比ハ既ニ色紙ノミニメ此書無リ
シ何ノ代ヨリ廃シケルヤト伊勢安斎遺憾セラレケル天明
ノ火災ノ後内裡御造営ノ時古ヘニ守画之大著色小
傳御書博士岡本甲斐守 勅ニ依テ画之 林大学頭 柴野彦助 奉
台命 其文章ヲ正セリ 我守国公奉行之所ナリ

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1
ガラス使用

一 嘉元年中閑院ノ皇居焼亡ノ後門裡障子写サレタリトミユ

△昆明池ノ障子 清涼殿ノ弘廂ニアリ
裏ニ野依山座アリ迪遥ノ図也 漢武帝ノ狩セシ図ニ手絹女
府大井川石ヲ出テ狩セシ図アリ

△荒海ノ障子 萩戸ノ前ニ立 手長足長ノ人ノ図 裏ハ宇治ノアシロノ図

△八子馬ヨモ馬ノ障子 渡殿ニアリ

△李将軍ノ障子 陣ノ座ノ上ニ立 虎ヲ射図

△養由基ノ障子 校書殿ニ立ラレタリトミユ 猿ヲ射タル図
巨勢金岡勅ヲ奉シテ画ケル夜馬出テ萩ノ戸ノ萩ヲ喰フ
勅シテ繋馬ニ筆ヲ加ヘケルトミユ 金岡後弘高画ケルトモ
其弘高地獄変相ノ屏風ニ楼上ヨリ揖ヲ差卸シ人ヲサシ
タル鬼ヲ画キケル見テニ精神入テ見エケル自云我運命尽ヌ
ヘシトテ毎程无ケリ名高キ妙ノ画工ナリケリ

巨勢金岡┬公忠─深江─弘高 極ニ公蔵ニ弘高妙音天ノ像アリ尤奇絶ノモノナリ
　　　　└公茂

一 建長元年閑院焼亡ノ次ノ日宮ノ左京何某頂（ボンノクボ）ニ大刀佩袖
ノミリシテハセ参ラセ大納言ノ二位ノ局ニ参リタリケルニ
実ニボンノクボニ佩タルニテアラズ箙ニ大刀鞘尻ヲ反ラシテ佩
頂ノ辺マテ至ルヲ嘲リ云シナリ大臾翌日イカメシゲナル体ヲ
云タリ 夜戦ニ揖櫃ノ夜ヲ逆サニ佩タルヲ翌日見テ夜戦ニハ
揖櫃ノ夜逆ニ佩ルモノト式法ニ書タルハ夜戦急キ揖櫃ヲ付
タル故逆ニ負タルニテ後ニ附会ノ説ナリ

一公方 祇園執行日記云貞和三年ニ将軍足利義満公ヲ指テ尊称セシ此ニ始ル後来コノ
号不播 公方ト云ハ今ノ時公儀ト云ニ同シ下民ヨリ
将軍家ヲ貴称スルニテ 天子ヨリ之ヲ命ズル号ニアラス

一肉食禁 日本紀天武天皇四年四月詔
莫喰ニ牛馬犬猿雞之肉ニ以外ハ不在ニ禁例ニ若有犯者
罪之

一按ニ此禁例ニ洩テシハ猪鹿ノ肉ハ無構ナレシ近来仏
家及神道家ニ之ヲ忌ム穢ヲ忌スニ過タルナリ

一御用人 所用人ノ役号 東鑑仁治二年九月七日ノ条檀山ニ
トシ今テ又為所用人分句除之し

一小児ノ養生 昔ハ小児ヲ育スルコ甚厚シ
東鑑三十四条ニ三歳ノ若君袴着ノ初 魚肉味セ後始綿
衣給云々
按ニ魚肉ハ小児腸胃ニ不叶厚味ノ物ナル故ニ三歳マテ食セス
乳ヲ与ヘ春之仏且小児ハ陽気壮ンナル物ナル故ニ綿衣ヲ
不為着袴着ニテ儀日ヨリ風ノ透通ルヤウニスルニ綿
ハ気ヲ漏サス大気ヲ包故ニ驚風五疳ノ病ヲ發ス
古人養ニ月ニ宜戒生産モ人遠国ニテハ痛少シ

一屋造ヲ戒 酉ノ年ヲ翌年ト云東方ヲ蒼龍箕宿一名梁
星 宮室営造セズト云々 結毦録

一年忌トテ死者ヲ追吊スルコ仏家ニナキコニ儒者ノ法ヲ借
用スルニ云々 桜町中納言甚文中納言信西入道ノ十三回忌修

セシト欲ス甚キ僧明遍高野山ニ住ス是モ同意セス又
云我佛法ハ四十九日ニメ止ム年忌千有ナシ其莫益ニ止ムリ
又京都相国寺僧瑞渓云一切経ヲ考ルニ年忌ノコトナシ
我国ノ先宿儒法ヲ借テ是ヲ行ス而已
按ニ今天台家ニ等二十四二十五四忌ホアリ今世寺僧ホ取者
年回三七ノ数ヲ以テ修行新死ノ如シ在家ヨリ金ホ帛
紙ノ布施ヲ貪リ得テ寺家日々ノ産業トス死ニ忌ヲ
預リ百年千年ノ遠忌ヲ弔テ無巧ニ其ノ宝ニ貨ヲ得ル
ノ巧ヲナスモノ也此文字ヲ以テミレハ佛道ニ死者四十九日後ハ
往生メ人ノ弔ヲ不待自ラ佛身ニ将化シテ追善スルヲ矢
ヘシ儒ニ今ヲ遠忌ヲ追ハ甚先人ニ同祖ヲ忘レザル誠ナリ

俗流ニ云ル者ハ曰ク死ニ疎シトテ新死ノ年ハ哀慕セシ人モ考.
情ニナルニ是ヲ得益ス思サモ実情ヲ尋ノ一要ト成ナリ
唐人ハ忌日不祭我邦モ古法忌日不祭別ニ良日ヲ定テ祭
無卿ガ祖ニ雑記ニ初メノ才ニ思梅ヲ書シト覚ユ野別邪
須雲岩寺ノ住僧月桂和尚暫ク為門ノ皇院寺補住タ
リシ寸ニテカ家佛事修シケルニ誦経ノ間十三佛ノ
像ヲ壇前ニ安置シテ誦経セシ佛事済テ其由ヲ尋
ニニ佛家ニテ新死ヨリ七々四十九日と一周忌三年忌七年
忌十三年廿三年卅三年トス以上十三度祭ル法ニテ十三佛ヲ
配シテ祭ルナシト申シキ其余十七廿七ホノ忌年ハ施主
ノ請ニ依テ修スナシト云シキ是モ無倫家ノ法ナルニヤ

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1
ガラス使用

サレト㵎家ニテ相国寺瑞渓ノ云ヘルトハ異也何レカ是ナルヤ
一貝多羅樹 多羅樹トモ云 一名貝多 方椶櫚直生極テ高シ長ハ九十天
花ハ黄ニ米子ノ如シ或人云多羅樹高七仞七尺是則四
十九尺也 七ヲ乗スレハ四十九尺也 梅ニ皆如此ニハアラス丈凡廿位ノ高樹ト云ヲ
知ニメタルナリ西域記云南印ノ 南印ハ南天竺ヲ云 建那補羅国
北多羅樹林アリ三十余里 林ノ广サナルヘシ 廿里也十三丁四方 其葉長広其色
光潤書写莫不采用
按ニ近刹来当邦初政ノ比天竺商買ノ者年々通交易セ
シ又渡天トテ印度地ヘ渡リタル僧数多モアリ多羅樹モ
貝多羅樹ノ葉ヲ可持渡ニ荷本古佛刹ニモ多羅葉ヲ収
セシ物ヲ不見貝多羅樹ハ名高キ物印度地ニハ右ノ如ク枝大
ノ物ナレハ数テ㐧年ヲ乏シテ取ラレザルニモ有マジ不審ト云ヘシ
天保之年ニ至ル頃ツミ無学寿代出門ノ人ニ而仏法ニ志ル序余
将来ニ祖多羅樹葉ノ残欠将来者ニテ見ルコトヲ得タリ其
事ヲ図ハ出書別記ニセシメヌ

多羅樹葉全長七寸バカリ幅ハ二寸斗葉ハ笹竹葉ニ似テ厚
シ二三厘モアリ無文字ハ不見耳也紙ニシハ竹葉ノ如シ
表裏古紙ノ様ニテ書理ナシ荒シ形状凡檳榔葉ニ
似タリ又モ檳榔ニ少似タリ十有余年ノ物ナレハ摩損玉
ノ如シ梵字濃墨ニテ書如シニ云墨モ書ニテ無シ
掲ケ竹箸ノ類ニ刻テ白書ニシタル生字ナレハ書痕ヲ
汁ニテ墨ヲ成タルシ佛経皆如此ト云ヘリ中ヲ丸ク穿ツ為ニ至テ

数枚重テ糸ヲ通ドシ古画文殊ノ像ニ中ニ糸通シ
タル所ヲ顕図ヲ見タリ是多羅維葉ニシ
テ一トセ何故大師将来シトモ貝多羅葉ヲ天台ノ僧見
セタリ其形状ハ水ナギノ葉ニ相似タリ長サ四寸余幅二三
寸アリ其文理個ノ如シ寺庸云知ナシ　安国公佛経
書写シテ納ラレタル謝物ニ一葉献上セリ御宝庫ニ有シ
棄却探ニ今日本ヘ渡来ノ多羅維葉ハ化ツ何枚若ノ
将来ト云ル物ト相似ツタリ葉ノ文理個ノ如クナルヤウニモ
見ヘサル形状ハ粗相同シ予カ仙臺ヘ官遊セシ時松嶋
瑞巌寺ニアルヲ始テ見珍シク思ヒ説ニ持帰　君上ニモ
献セシク今テハ都鄙所ニイクラモ有テ珍シカラス宝物ヤイナヤ

一古代澁川氏東鑑巻八文治四年戊申正月廿日頼朝卿二位殿直鎌
倉令参詣伊豆箱根三嶋社寺給武列参列随兵源
氏人大夫上総介新田冠者里見冠者澁川三郎ホ扈従
又同九文治五年己酉六月九日鶴岡御塔供養ノ条ニ頼朝
参詣先陣随兵ノ中澁川三郎義秀トアリ廿代澁川ハ座尻ニ
川刈ノ澁川屋なべし

一服差ハ本ハ隠鋏トテ長六七寸鍔モナク柄モ石巻懐中ニ隠
シ差タル懐鋏ニ今ノ脇差ノ刀ナリ東山殿ノ比ハ腰刀ノ代リニ紛ラカメ
外ニ差ス人モ有之信長秀吉ノ比服差ノ寸ヲ長クノ鍔ヲ入
柄ヲ長クシテ大刀ノ作リニメサス事ニ成タリ此用法ハ広キ所ニテ
ハ刀ヲツカヒ狭キ所ニテハ服差ヲツカフ為ニ

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1
ガラス使用

梅ニ袱ヲ以テ秀ニ今ノ刀ト云ハ折刀之服差ハ腰刀ノ長作
ナリ今ノ服差ヲ短ク作リ一尺四五寸ヲ用ルハ昂腰刀ニ鍔ヲ
入タルナリ

一武具要説（高坂弾正作ト云）天文中武田信玄武略創作ノ事ヲ諸臣
ニ論辯ヲ記サシメシ書 刀服差長短得失ノ論
此書ヲミレハ天文比大小サス事起シルト見エ今ノ風ハ新戦国
ノ形ノ遺傳甚僣行ハルヽ也（室町殿ノ比迄ハ武士腰刀斗帯太刀ハ折刀供者ニ持セシ腰刀ハ鍔モナシ今モ同異ノ短刀也）
（太平記四十南都ノ衆徒両三服指ノ太刀ナレト同意ノ事セシハ天モ多論ナキ小刀ヲ衣ノ内ヘ隠シ服ニサシハサミ外ヨリ不見様ニセシ服差ノ太刀ト云レナルヘシ 云タルハナシ今ノ服サシト云タルナリ服差ノ刀ト云タリ又云隠刀ナリ）
梅ニ今テ用ル小サ刀ト云物ハ折刀ハ長スキ殿中ニテ坐布向ヘサス事
ナラス又腰刀ハ合口ノ類ニテ柄ノ用ヲナサス故ニ折刀ヲ短ク
小サク拵テ今ノ服差ノ如ク用タルヘシ夫ヲ移シテ服差ニセ
シ 維刀ニ鍔ヲ入テ折刀ニ添サシテ大小ト唱呼事ハ大向比ノ書ニ見エ

一匹 疋夫疋婦 馬一疋 犬一疋 緒一疋 銭一疋（宇注曰疋合丈之馬）
石云一疋ト云ハ馬ノ目ハ縮一疋長ノ間ヲ見ルヽ（吉景一疋ノ長サナリ）
△二疋ニテ人ニ人ノ着タケ也夫婦二人ノ衣裳トナル故ニ一疋ト云ナリ
夫婦テ人ヲ一疋ノ夫婦ト云也（論語ニ匹夫匹婦ト云是也 疋ハ配ナリ 物ヲ一対ト云ニ同シ）
△犬ヲ一疋二疋ト云ハ犬追物ノ時河原者轡ノ内ヨリ犬ヲ放セハ
一騎馬一矢ヲ射ルモノ二騎三騎一同追カケテ射ル氏本ニ九矢
ハ一ツ助ナリ馬一疋ニ犬一ツナル故ニ犬ヲ一疋ト云ナリ
一常ニ矢ヲハ一疋二疋トハ云難シ然氏世俗ノ詞妄ニナリ常ノ
犬且兎鹿狐狸猫鼠小虫ニ至ル迄ミナ一疋二疋ト云習ヘシ
通言トハナレリ
△銭一疋百疋抔云ハ犬追物ノ時河原者犬一疋ニ銭十文ツヽヲ取リシ

故ニ犬百疋放セハ銭百疋（弐メ文）五十疋放セハ銭五十疋（弐百文）ヲトル十銭ヲ一疋ト定ル故此数出タリ　今金百疋ト云ハ金壹歩ハ銭弐貫文ナリシ故ニ

牛ハ一頭　鳥ハ一羽又二羽一雙一羽ハ一隻ト云ナリ

一 釘貫門町ミノ木戸ヲ云シ人ヲ通スマシキ為入セマジキ為ニ釘ヲ打通シテ根ヲ不返故ニ釘貫ト云シ

一 安扇ト云ハ古昔ノ鎧ハ右ノ脇ハ作リ自ニセズ別テ作ル故身ニ脇楯ヲ当テ着シ其後鎧ヲ着スルナリ脇楯ニテ右ノ脇ハフサカルベシ如此ナル故先祖ノ鎧ヲ子孫ニ傳テ着用スルニ身ニ不合ト云コトナシ今ハ鎧師カ私ニ纏ヲ仕出シ右ノ脇ニテ合セメ伸縮ノナラヌ様ニ拵タリ如此鎧ハ胴内ニ空シモ多ロキナキ故身ノ屈伸ナラス症ヒナシ昔一父ノ肥タル子瘠タラハ父ノ具足ハ着用ナラス父ノ瘠ニ子肥太ル尤然ラモアリ一代限ニ製造スルコト甲冑ノ外ニカヤウナル窮屈ナルコトナシ

安扇者モ甲冑ノ法也シ今世ニ衣服ヲ裁縫スルニ若長ヨリ寸尺ヲ伸テ裁テ之テ後人ノ着用ニ仕立直シ自在ニナル様ニスル諸布如キモノスラ如此スルニ況ヤ甲冑鉄革ヲ鍛若重ニ黄金ヲ不吝性命ノ際ニ用ル器ナレハナタニ作ル然シハ甚甲冑戦切モ有メラハ猶更當ニ布子孫ニ付用ヒニナル様ニスヘキハ勿論ナリシ又着用スルニ屈伸ノ自由ナレハ進退ノ働ニヨリ弛縮メモスヘキ意ニ随テ自在ナラサレハ意滞テ不任モノ也鉄ノ筒ニ身ヲ収メ弛緩ニモヨリハ屈伸自由ノ脇楯ノ製ヲ造不可ト八思氏具足師モ之来哉

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1
ガラス使用

勝手ニ拵タルニハアラズ注文ハ当人ヨリ出セハ当人ハ戦国ノ人ニ
テ度々戦場ヲモ経テ得失ヲ考定テ甲冑師ヘ注文セシ
ナリ然ルヲ後人新調注文スヘキナリ具足師ノ工者ナルヲ可据
択切者ノ工人ナラハ数多製作造ニモスヘシ誰人イカ様ノ具足
注文アリヤト尋問拵人ノ注文ヲ見テ甚円吾気ニ應セシ
注文ニ因テ又戎考ヲ加ヘ新調製作造モスルコト然ハ此就
縄トテモ具足師ノ工夫ニハアラズ場騎切者ノ老武人
拵ノ考出セルナルヘシ然レハ服着ヨリ今ノ具足ニ便利アルヘ
必大サキニアラズ今昌平ノ御代畳ノ上ニ坐メ甲冑ヲ飾物ニ
メ実用ヲ不知者トテモ可探コト也故ニ当時ノ具足ニ屈伸
自由ナラズハ悪トハ考ノ氏之亀天正以来 陣戦ヲ踏タル武人

ノ工夫シテノ注文セシ者具ナイ故根ニ批判セサルナリ

一 安斎翁古ノ鎧ハ草摺ニユルギノ糸ナシ今ノ具足ハユルギノ糸
三寸許アリ実用ニ右亘ユルギノ糸付ル故草摺ノ胴自向危シ
古人ノ鎧ノユルキノ糸ナク作リタル亘ト図モアリ
筆ニ翁実用ヲタメサス論シ予先キニ具足ハ最上胴腰メリテ
亘クユルギノ糸ハアレシト考新調具足ヲ作ル明珍大隅ニ注
文ヲ昏セ拵新調出来後一日甲冑ヲ着シ叙鎗ホ歩走
シテ試ム初ハ身体堅固ニテヨカリキ無時後ニ及ヒ腰ニセリ
痛疾シ甚煩ス且肩背下ヘ引ケ揚テモ～ニテ肩ヒケテ苦
痛ニ不絶於茲最上胴ノ事ノ拵ノ事ヲ同キ天正以来日根
野風ニ外ヘ反シ動キ糸四寸ニメ其ユルギノ糸ヘ縄メヲ結ヒ上ニ

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1
ガラス使用

上帯ヲ結クリ此ユルキ系ヲ胴尻ヘハズシ結フ寸ハ胴ハユルギ
系メタル上ヘ掛リユルキ系無ナリテ胴尻ト下散ノ扱実合
揉ミナル如其着スレハ胴上ヘ上リテ綿噛ユルヤカニ有餘アリ
テヒケズ始テ中古ノ戦場ヲヘタル工夫ニ感得シタリ右未タ
其ヿヲ不試空稱ト実考トノ違有ヲ弁ヘラレザルナリ
又云鎧ノ栴檀ノ板ト鳩尾ノ板ト両方替ルヿハ右ノ手ノ臂ノ働ク
方ニハセンダンノ板ヲ用千旦ノ板ハ伸縮アリテ臂ヲ遣フニ妨ニナラ
ズ鳩尾ノ板ハ伸縮ナク強直ナル物ユヘ右ニ鳩尾板有テハ直垂
小手ノ袂ナトニカヽリテ妨トナル故右ニハ鳩尾板ヲ不用シ又左ハ
右ノ手先ノ働ク不足ナル故千旦ノ板ヲツケテハヒラメキ妨トナルユヘ左ニ
ハ不動鳩尾板ヲ付ルナリ

一 予嘗テ千旦鳩尾板ト左右違タルヿヲ 守国公ニ伺ヒタリ
公曰鎧着スル代ハ弓ヲ以テ専戦争ス左右ノ脇ハ透間アリ
脇間ノ大切ナル要所ユヘ千旦ノ小鎧ヲ用テ防クシ然ニ左ヘ千旦
板ヲ付テハ弓ノ弦走ル寸小札ニヒカヽリテ妨トナル故小札ナキ一
枚板ヲ作テ脇間ノ要所ヲ防タルシ其千旦鳩尾両板元ニ下リ
裏ニ緒アリ此緒脇ノ方ヘ寄リテ陌是ヲ結フ緒ハ此緒脇ヘカケ
狗隠ニテ結フトシ故ニ弓射ル寸障ザルヿナシ是ニナ其時代ノ
ノ用ニ随テ創意違アルヿシ後世ニ考テ推量ノ違フヿアリ
一 延久四年壬子三月七日藤原仲季府宮ノ辺ニテ白狐ヲ射殺タリ
然ルニ是白専女神ニシトテ其罪ニテ土佐国ニ配流セラル
安斎考評ニ云李朝白狐キヲ貴フ故其失アリ野獣ノ白狐国

国立国会図書館 鶯宿雑記 238-1
ガラス使用

家ニ無益白狐神ナラハ何ゾ人ニ射殺サレタルヤ是神ニアラザル
証拠也獣ヲ殺シ人ヲ科ハ政ニ於テ愚ト云ヘシ
菓ニ鶴大タヲ殺生スル罪科智行ル是ハ鳥獣ノ事ニ名ニ
アラシ国禁ヲ犯セル罪ナリ鳥獣ニ拘ニハアラズ
其卿按ニ此時甚外白鳥ホノ大鳥殺生禁制ノ事聴シ
訴解有テ何レノ所家（此所家ヨリ一本書）ヨリ段々伺有シ公何ソ洩レニ
大鳥殺生ノ事世上禁制ノ由申觸ニヘ[illegible]公辺所制有禁ノ
石見落白鳥等殺セシメ[illegible]ニ無キ[illegible]無シ依
其国ニの制禁[illegible]公裁シ書中ニ之アリ[illegible]
大ニ殺生ヲ禁シハ[illegible]無キ[illegible]

一 贖（アカモノ）物 身ノ代科ヲ被弃ルヽ身ノ代ヲ名乗ノ後紙衣又人形ヲツクリ 身ノ代ニ作リ流シ云弁ノ類

素盞嗚尊千座置戸之解除以テ爪為ニ吉爪弃物以テ足爪為ニ凶
爪棄物ニ乃使天児屋命掌其解除太諄辞而宣之焉
世人慎テ爪ヲ収ルハ其縁也ニ是尊其悪罪ヲ被清ルニ手
足ノ爪ヲ以テセラレタルヲ贖物ニテ祓ヲシタルコト神代ヨリノ遺風ニ
爪ヲ捨テ贖罪スルコト毎月晦日又六月十二月朔日ヨリ八日迄八ケ
日ノ贖 近年武ニ於テハ此ノ贖物アリ

一 肩衣 万葉集
松永貞徳云久秀素袍ノ袖ヲ取弃テ肩衣ヲ作リタリト云ハ虚説ナリ
又近衛龍山公彦別ニテ造リ初ラレシト云モ誤ナリ
錦（ワタモナキ）毛無布可多衣乃美留乃其等和々気佐我礼
流可々布能尾肩尓打懸　布可多衣ハ布肩衣ナリ
右布肩衣ハ袖無シテ肩ハカリ懸ル衣ナル故カタ衣ト云ナリ
是ハ貧賤ノ者ノ服ナル故袖ヲ省略スルシ又著聞集ニ

下﨟の装束ハ千早と白布天冠を着て湯を撒ク(神子)ナリ あり
笠カブリ装束ナリ 是肩衣也 しとこく
予蔵冊松浦家足利将軍家より拘頂ケル錦の肩衣
ノコヲ書記シケリ其紙ヲ見テ古キコヲ記ス上下ト云ハ神代
ヨリ其名アリ帯ヨリ上ニ着ル衣ハ上(カミ)帯ヨリ下ノ衣ハ下(シモ)ト云ナ
ハストモ云 應神天皇紀ニ上下ノ衣服ヲ 是上下ト云コ古昔ヨリ云今ノ上下ト云モ
上下ノ衣服ノ略ナリ

一 本庇ノ鐘 此本庇ノ出所ハ如元佛書ヨリ出ル歟未詳
本庇ト云狂言ニ梅ノ尾ノ茶ヲ作ト云ヲ是等ヨリ出ケル歟
本茶ハ梅尾明恵上人入唐将来ノ茶ニ非ノ茶ハ宇治ノ茶也
非ノ字是非ニ對シ文字不宜ユヘ飛ノ字ニ改タル歟
兼卿梅本蒲牧氏家蔵本飛ノ鐘ハ古主京極家ヨリノ賜ト云聞ナレド
本庇ト称ルコトハ不詳ト雖前ノ義ヲ載タルハ外ニモ数アル物ト見ヘタリ

一 堂上ノ烏帽子ニ栄花物語 伊周公ハ病重く成て姫君をの
御方ハ宮仕あらせなと思召されて殊に遊ばしてこそ
烏帽子ひき入とハ立烈をひき入てかけたるやうにならぬと
引侍るときこえし
葉ニ古人ノ云如此ニハアラズ文政中廣橋一位殿参内せり
ケル風邪ニテ悩ミケルニ或人見舞ニ行タリシニ衣冠ノ
衣ヲ被キ烏帽子ヲ深クヒキカブリ立テ其行儀正シキ
コヲ称セシ人語リキ

一 長持 旧書ニ妻ことちかのもの ハいとおかしかりしものにて入
てお ぬ 衣服など入て 長持たしめて ところ
一 桂秋訓 着述ニ信云看ナシノ鐘ハ紙釧也ト云

錦繍万花谷後集甲冑ノ条ニ曰襞紙為鎧（襞ヨルタヽム摺也 字彙）
唐徐商河中節度置備征軍千人襞紙為鎧
故老公鎧紙鍛年ヽ剝落セラル鎧ノ甲ノ内ニミヽツト云物ア
リ是ヲ糊ニ和ス糊ハトコロヽ紙ヲ練ル鉄石ニ類ス矢石裂
破ナキナリ

一常憲院様御庭ノ松ノ木枯ケル時御心ニ掛サセラレケル寸
御秘蔵の山彦の松ハ枯けり我か歌を君ゆかりて　法印北村季吟
其歌ニ依テ御加増百石賜リケル

一浮沓　麻ノ袋或ハ布袋ノ内ヘ瓢箪ヲ数ツモ入テ胸通リ下ケテ結白ニシ馬
ハ四方手ヘ結付ルナリ猪ノ鮮サルヲ要トス只ハ瓢ニテモヨロシ
按ニ旧時本永兵馬腰ニ瓢箪ヲ多ク結下ケ瓢箪樹ト云ヿ
セシ其比ノ流行シ是ハ此浮沓ノ料ナルヘシ只ハ瓢箪数弄スルニハ

一烟草　晋蜀胡ノ使者楊列ノ駅館ニ五寸响含後玉盃ニ斎卅ヲ株シテ
添之以管ヲ以テ乃ニ烟ヲ吹シムト記ス
又　西域ノ玄律中華ニ入後漢ノ順帝ヘ一束香艸ヲ献メ曰吾
邦ノ一草使口含若烟ト云リ云ヽ
此記ヲ見テ唐土ニテハ昔ヨリ煙草ヲ翫フヿ久シ此玄律
天竺ノ人也印度西地方ヨリ唐土ヘ渡リタレハ其古ヲ知ヘ
シ本字斎也今蔦ヲ用玄律ノ事実絶妙ナ占テト云書
ニ載ス

一武田家旗　甲府萩原村雲峯寺蔵
孫子旗長一丈一尺六寸幅二尺三寸

疾如風徐如林掠如火不動如山

紺地文字金泥

諏訪法性之旗長一丈三尺五寸幅一尺五寸

南無諏訪南宮法性上下大明神

赤地文字金銀

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1
ガラス使用

一 花其ノ旗本地

一 金沢文庫足利学校　武州金沢称名寺ヲ金沢山ト号ス
其ハ阿弥陀院ノ後切通ニ右ノ畠足文庫ノ跡也北条越後
守顕時文庫ヲ建和漢ノ書ヲ蔵ム儒書黒印仏
書ハ朱印押盲ニテ金沢文庫ノ四字ヲ印ス後上杉安房
守憲実執事ト有ル是ヲ
上州足利学校承和六年小野篁上野国司ノ時建之
管領源成氏ノ時金沢文庫ヲ再興シ日本一所ノ学校トス
西国北国ヨリ学徒集来盛栄天下ニ鳴トモニ

一 徒然草ハ今川了俊兼好法師カ住ケル吉田ノ感神院ト俣ノ
草庵ノ壁ニ張タルヲ人ヲ遣シ集メ一冊トシタルニ兼好ノ編
タルニハアラス壁ニ編書メ張タルナリ

一 尼年数十九ハ董若 廿五 五ニ廿五ニ董後トハ死後ノ丁 三十三ハ
三ニ敬ニ四十二ハ四二死ノ仮名ニ当ル忌言ヨリ俗人陳ル物忌シ

一 月代之亀天正ノ比ヨリ天下一国ニ月代剃タルトトシタルト云
伝フ尼其以前之事比ヨリ足利家ノ比額上ヲ抜シ
剃テ今云半ヨラ月額半月ノ形ニ剃上タルアリ月ノ形ニ
似スル故月代ト云シ古キ父ハ宝海ニ云安元二年七月八日
建春門院崩御ノ記ニ自件簾中時忠卿出首示
左右臣以下云 其影顕不正 月代大見苦 業ニ時忠何ハ女院ノ兄ナル卿
簾中ヘ出入免サレタルナルヘシ
安斎随筆日砂石抄ニ月代ノ痕ト云コトアリ逆上陰キ人

月代剃タルハ天下万民ノ俗風ニアラサリシ　古人常ニ
烏帽子着故逆上除ク月代剃タルナリ

一警蹕　昔朝ノ警蹕ハ近衛司天子出行ノ時御先ヲ拂フアラ
くト高声ニ呼ハルヲ云ナリ是ヲ先ヲ追フ叱サキ声ト云シニアカ
従井越前家臣高野繁亨師ニ在シ時秋葉式ヲ伺フ近衛
殿下参内ニ掛ケ表殿前ニ進テシテ時庭上大将中将少将床
几ニ虎班布敷隈掛弓箭ヲ持シ警衛ス殿庭遊歩ノ是ヲ蹕リ御ナリトモ云
時ニ庭上ニ在テ高声ノニ警蹕ハト唱フ其声ニ應メ大中少
将床几ヲ下リ平伏スト云リ

一大坂冬ノ御陣十二月廿五日鴫野合戦ノ砌上杉家臣杉原常陸
介ト云七十余歳ノ老武者鎧ノ上ニ緋地錦ノ直垂ヲ著タリ
大御所様ニモ上覧ニ出テ直垂セト上意ヲ蒙リケリ是ハ人ノ聞ヘシ
ナ直垂ト思テ已ニ雖以戦陣ニモ鎧直垂ヲ著スト言リ実ハ
直垂ニアラス其日殊ニ極寒ニ天ナリシニ折ヲシ能装束ヲ
途ニ出アリシ故老人寒ニ氣ヲ防シ為ニ甲冑前ニ其長
緒ヲ著タリシナリト云

一元日吉書始　大きらうてひしきいもてとちきとくしちおもてくら
こしのりとちみよ
飲食始　花庫開　着衣始　湯治始　輿ハ鴐乗初
掛物始　吉と書例文し只ひらくらけきり作ら浅淵古て不
詳或ハ此日始ト言是年山井同賀益王日花御コワ以ニ此日
トモ云ヲ一ヶ和名抄海人漢苏宇ヲ以テ飯ヲ食スル始トス然
氏已ニ其國アリ賀益王日花明應十年ノ記ニ上古ノ言ニアラス

且コワ飯本式ヒメ飯ハ略式ナレハコワ飯ヲ記サスヒメ飯ヲ書スモ亦
不審シ　安斎翁考云ハシメテ馬ニ乗始シト云説アレト是
又此ニ馬乗始トアリ或説ニ夫妻接交ノ始ト云フシテモ
熟考スルニ此説実ニ本意ナルヘシ年ノ始ニサテ〳〵ノ事初アリ
夫婦交接ハ笑ヘキヿニアラス交接子孫繁昌ノ根本ニシテ万里
是ヨリ重キハナシ冠婚葬祭ハ人倫ノ礼聖人既ニ是ヲ先トス
サレハ年ノ始ニ必此始アルヘキヿ尤シ習俗好色淫乱ノ心ヨリステ
恥カハシク遊戯ヤウニ思フハ非也夫婦ノ交ハ好色ノ義ニアラス
夫婦ハ五倫ノ一婚礼ハ儀式ノ一也年始ニ姫始ト云祝儀者
ムヿ婚礼ノ祝ニ准スヘシ可隠ヿニ非ス婚礼婚姻祝貴賤公
然トメ吉喜シ親戚相集テ媒ヲ構テ交接ヲナサシム衆人
来賀ス故ニ恥色ナシ姫始交接ナルヿト思ヒ心裏恥テ外事
トス人情同一ニシ仍テ是ヲ不詳ト諸説多キ所以ナリ
然氏年中道三羽守甲子庚申是日ヲ交接禁戒ト云暦ニ宜
キト出セハ正月朔ハ無名ナルヘシ

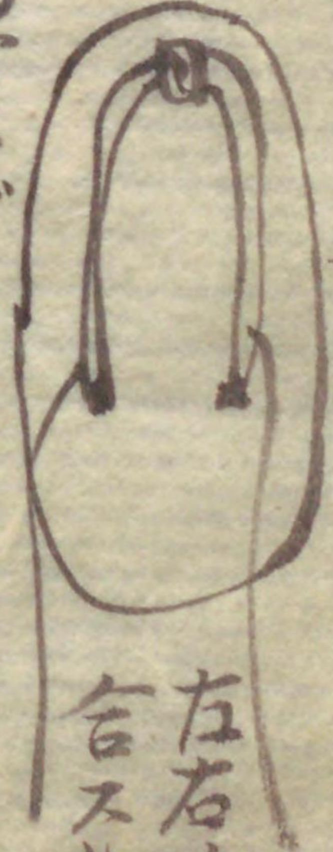
一盞膠チヤン　チヤンハ蘭名也　天正中和蘭陀欽奴来磨ト云者傳方
綱ニ塗ルチヤン法　松脂三百目　荏油三合　黄ハ蝋（樺蝋ナリ）九匁
木ニヌルチヤンノ法　松脂三百目　荏油二合　白蝋五十匁　胡ノ油用ハ非ナリ

一裂矢羽　桜木ニテモ餘木ニテモ堅木ノ平タキ上ニ羽ヲ釜羽表
ヨリ槌ニテ打ツ羽茎ヒシゲテ茎ノ真中通リ裏表同様溝
筋破レ目出ルヲ如此シテ茎ノ本ヨリ小刀ヲ以テ裂ヘシ
割ルノ寸ハ鋸ノ背ノ如キ挽目板ニ羽ヲサセ挟ミ小刀ニテ茎ノ心

キホリ附木賊ニテスリ焼鉄ニテ熨斗用ルナリ

一 打身 牛糞ヲ乾シ熱湯ニヒタシ患頻ニ治ス奇法也 本書ニ包用
乾牛糞ハ香気不悪天竺ニテ佛書ニ用ル位ノモノナリ

一 ゴンヅウ草履 ゴンス草履 武者草鞋トモ云
今世小児歩習ノ寸用之
此ゴンス大人雨天甚外山野
遠足ニ用之戦争ニ用ルヿ源平ゴロヨリアリ



左右ノ紐ヲ結ヒ合スルナリ

一 通用金名目 舟印手 花印手 大佛判 古大判 新大判
武蔵判 駿河判 甲州判 京小判 佐渡判

一 長巻 三尺余アリシ刀ヲ鞘ナシニ柄四尺余リニシテ徒立ノ士ニ持セシナリ 信長公好テ百人先ニ押立シト
拵ニ長巻ノヿ別巻ニ記ス此三尺余ノ刀ヲ長巻トハ作為タルハ
時ニ取戦国拵ニ仮用セシナルヘシ長巻ハ長刀ノ大太刀ノ柄拵
ニシテ長巻トモ云之ヨリ長巻ニ作タル物ニシ此説ハ真ノ乱長巻

一 馬ノ口切ニ妙薬 女ノ髪ニ用ル小枕ノ古ク油ニシミタルヲ黒焼ニメ
サルボウ貝等ヘニメ附ル奇効アリ

一 首縊セシ木等ノ下ニ人魂アリ 土中三尺計堀赤土ノカタマリ
ノ如シフハリシタル物アリ是人魂シ是ヲ取棄サシハ其所イ
クタリモ首縊ルモノナリ

一 寝小便 兎ノ蒸黒ニ細末ニメ白湯ニメ呑シム 行積ノ法 舌白ノ乳汁ニ云

一 兜四天ノ鋲ノ下ニ花鋲有トモ云 借ノ丁 輪縄アリ是ハ夏日笠ニ着附之
古図綾錦笠ヲ冠リタル図アリ 笠ヨリ緒ヲ下ゲワナヘ通ス竹釘ヲ鞋ニメ通ルナリ

一吉書冊 吉事ニハ吉書ヲ上ニシ凶事ニハ紫ヲ上ニ人書

一朔日廿八日礼 廿八日ハ星ノ礼ト云ハ大誤ニ〆朔日ハ古代ヨリ有例ニ
廿八日ハ 権現様三河ニ御座アリシ時三河ハ門徒宗多メ御家
人ハ多ク皆一向宗徒ナレハ寺詣シテ上下席ニ御機嫌伺ニ出シ
君上モ如例廿八日出仕御待アル左後ハ毎日同様ニ被仰付ル是ニ

一早ニベ リ口 加羅ト輩書 並シ膠ヲトキテ引ヲ附ル也丁ニベニカトラス

一陣羽織 具足ニテ不成 上下モ不用時着用スルニ表ヲ上下着用ト云
私ニ用 文禄天正比ノ例ナリ

一甲冑着 侍角ナル法 三尺八寸ノ法ナリ

一扇流 東照将軍光礼寺御成ノ時小童ノ持扇風ニトラレ渡
月橋ヨリ嵯峨川ヘ流シヲ面白ク見テ供奉ノ人ニ各扇
ヲ流セシ其後五山寺内ヘ御成ノ時扇風ニ其図画シ足
其始ナリ其以来御成ニ扇流達ル例ト成タリ

一平声入去上声 唐土ニテ詩ヲ唄フハ四声平仄ノ弁降唐人ノ口
舌ニテ唄ヒ叶フ 和朝ノ人ハ如何様声音ノ妙ニ至ル迄其国ニテハ
其地ニ仍テ出ル声ナレハ唐土ノ人ノ口気 和人ニハ不出故ニ鳥語
ノ音不出 唐犬ノ吼声和犬不出ト同日ノ論ナリ

一平声（ニリ声長クリ音平ラナリ） 」上声（ニリ声上ル） 冂去声（ニリ声下ル） ●入声（ニリ声ツマル） 右声音図式唐人ノ唇タ
ルヤ名数ノミニ実ハ業ヲ用サレハ不可弁
予壮時薩州ノ儒臣石塚某ニ唐音ヲ學ヒ此宗師
左ツ薩州ハ南京船漂着多ク名ル時彼ニ通辞官仰付ル
人也唐音ハ應對スル傍ニ同人云清人モ如斯左ツモ
土語ニ音ヲ是ニ不異ハ能舌載ヲ得タリト云リ此如斯左ツ清人ニ

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1
ガラス使用

詩ヲ学ヒテ相倶ニ唄ヘタリト云フ声唐音無キ名ルヿ四声ノ叶韻ノヿ
ヲ穿鑿スレ氏亦不相分ル是ヲ以テ和人ト清人ノ違アルヿヲ
知ル是ハ清土ニ生レ其詩ヲ学ヒハ口傳分別スルヿ可知今
明楽ヲ奏スルヲ聞合奏ヲ聞亦ニテ詩ヲ唄フニ不異
サレハ声音可テ聞耳ニ不同ナリ
西崎翁曰唐ノ本音我国ニ在リ唐ヨリ書籍ヲ渡シ訓讀
傳フ唐代遣唐使往ミ入唐メ其正音ヲ和朝ヘ傳ヘシ後
元人唐土ニ入宋ヲ亡シテ之ヲ一統シテ始テ夷狄ノ音ト唐土ノ正
音混交シタリ其後又韃人明ヲ滅シテ清朝ニ代リ明韃
韃ト語音交錯シテヨリ弥ミ唐国ノ本音ハ失ヒ今ハ全ク
本国ノ正音半過夷ノ音トナリタリ明朝ニテスラ大ニ之ノ国音

古昔ト相違スルヿサレバ全ノ古音ハ本邦ニ傳テアルヿ然ニ近代ノ
儒者長崎ニ往テ清商等ニ訛語ヲ習ヒ正キ唐音ヲ得
タルナト云ヿ誤ルハ甚誤リ也故ニ今傳ル漢音ハ実ノ唐音之ミ
極ニ唐土ニ本正ノ音ハ失ヒ今代夷狄ノ音相交リテ正キ古音
ハ失ヒタリト西崎翁云ニハ尤ナレ氏今ノ清人ハ能ミ〆ル唐
人ミ其本音ヲ変ヒサル謹擬ハ清朝人ノ漢文ヲ読返リ
点ヲ付テ読ヿナシ皆流下シ棒読ニスルミ本邦ノ人ハ大儒先
生ト雖モ返リ点ニテ下ヨリ上ヘカヘリ読ザレハ義ハ通ゼザルナリ
唐土ノ人ニ返リ読セハ必ズ分ルヿミキミ平生日用ノ言語ナリ
読セザレハ通セザルハ扨モ不自由ナルヿト云ヘミサレハ唐人ハ漢
文ヲ和人ノ仮名書ヲ読ト異ナルヿハ無ルヘミ是ヲ以テ唐土ニテ

古昔ハタトヘ失フ氏語法ハ古昔ニカハルコナキ也　本邦唐ノ正音
傳ヘタリ氏肝心ノ流法ヲ傳ヘザレハ全流トハ云難シ其用方
ヲ不知器物ヲ蔵スル如クナリ
文政中和蘭陀国ノ製眼鏡船来ス善美ヲ尽セリ長
崎商人高價ヲ投シテ買得タリ是ヲ浪華ヘ送ル浪華ニ
テ賣ニ用法知ル者ナシ種々工夫ヲ回ラシ考シ氏用ヲナサズ
遂ニ買人ナシ迎傳シテ大津ヘ携来ル膳所ノ医山田大円
ナル者是ヲ見テ僅ノ銀子ヲ出メ買求タリ夫ヨリ用法ヲ
考意ヲ凝シテ日光ヲ受数顆ノ玉鏡ヲ位置ヲ定メテ
加架シタリシニ金星ノ大サ五尺余ニ写顕スコアリ是ヲ見
タリ実ニ此器有テ此用ヲ施ス寸ハ價千金ニ此器アリ
氏其用ヲ得ザレハ無益ノ贅物ニ大円有テ始テ器用ヲ啓ク
大円ノ如キナケレハ器有テ其用ヲナサズ仮令強テ工夫
者出テ效シク見ルヿヲ得ル氏全ヲ見サレハ只労シテ切
薄シト云ヘシ
ベルリント云物清商船来シ唐人画彩ニ用ユ清人ノ画ク処
ヲ見ルニ青碧石光潤心酔セシム　和朝画工種々ニ心ヲ練リ
考トニ氏其全キ色ナシ是物大円カ出鏡ヲ考用スルカ如キ
者出ハ其全色ヲ得ヘシ物皆如此漢字モ亦其流法ノ
全ヲ傳得タラハ今ノ下上返リ点ハ不用流下ノ本法ヲ得ヘシ
本邦漢字傳テヨリ以来唐人ノ如ク流了不能ハ流法ノ傳ヲ
失ナル也其物有テ其用法ヲ付得ザルハ青碧ノベルリンヲ和人

用ル青色ハ出セ氏本邦未タ其用法ヲ不知ハ只書絵者尋常
ノ藍ニ若シリ況ヤ清商ノ渲彩スル色ノ如キ光潤更ニテシ似ステ
非ナル物ハ然レモ其ハ奇品ノ物紛末ノ色募光可愛敬スヘシ是
ニ膠水ヲ和シ画繪ニ施シ彩渲スレハ忽本色ヲ失ヒ悪色
見ヘキナシ猶漢字有テ其読方ヲ傳得サルニ譬言フ此等物ノ
用法ヲ不得カ如シト云ヘシ是ヲ以考レハ今清朝ニ至ク古音ニ非ス
氏其音韻読法ヨミ下シテ義ノ通スルヲミレハ漢唐ヨリ今ニ
至テ言理ハ少シモ今古差違セザルヘシ今ノ清朝作ハ俗書
小説本ノ類清人ハ日用ノ手ヲ居タレハ是昌科今時ノ戯作本ノ
如ク清人ハ女童迄読戯弄スルヘシ我邦ヘ渡来スレハ返リ点ヲ
加ヘ読解尤難シ是読法ノ全方ヲ不知アテ読ナレハ也唐法不
可和人ヘ読テ可不ト訓ズ仮令ハ唐山ノ言辞ハ黄檗僧ノ読経ノ
如クシ然ハ本邦唐音ヲ傳ヘタリ氏無用物シ若シ其漢唐ノ
正音トテ清人ニ傳ヘ真ニ是本音ナリ氏能ニ好事ノ者ハ不知無用
ノ音ト云ヘシ本邦ニテ源氏物語伊勢物語ノ詞ヲ傳解得モノ
ナシ一言モ今日用ニハ役ニタヽズ論義ヲ聞テ其義ヲ知ヘシ清人
漢唐ノ音得タラハ猶本邦ノ源氏伊勢ノ詞ノ如ク解知タル者
ハアラジ只古音ノアルヲ宝貨トスルノミ今我相ニテ和学者同
志會合スル氏源氏伊勢ノ詞ヲ以テ談話スル者ハ非ス今時代
ノ訛世俗語ナラサレハ通用ハセザルヘシ今ノ詞ヲ謗リナガラ今ノ
詞ヲ用エ夫日用ノ千家人奴婢ニ物言ニ正語アリ氏言テ通用
[illegible]知テ用ヒズ一笑スヘシ且夫今日ニハ古音旧語ヲ用ル氏其身モ

亦幼少ヨリ言ヒ習タル言語改革スルコトハ不能ナリ
東陵先生ト云シ本田龍蔵俗語ニ腹ヲ立ツコトヲ業ガ煮エルト云或ハ
業ガ沸クト云是ヲ先生臓ガ煮エルト云ヘリ人或ハ聞テ怪ムコト
多シ是僅ニゴウゾウノ違ヒナレドモ世話ニ通セズ況ヤ一ゝ言語
ヲ正シ言ハバ必ス違用スヘカラス或日 君公龍虎ヲ召親書ヲ
賜フ札有ニテ拝受シ上言ス是ハ手方奉仕合ト云人是ヲ
笑フ正俗今テニ迂遠ニシテ不敬ナル如シ

漢字本邦ヘ傳来セシハ應神天皇ノ御宇三韓ノ人王仁ト云
者始テ字書且唐山ノ歴代ノ書ヲ渡シ王仁来ツテ是ヲ読
教ヘトヱフ然シハ此御代ニハ唐山ノ読法ヲ傳テ和人唐山ノ如ク
読下シニ読解セシナルヘシ其後如何メ此読法ヲ失ヒシヤ吉備
大臣ノ遣唐使ニ行帰朝シテヨリヲコト点ヲ読テ教ヘ漢文ヲ
読解ス法トハ世ケリ然ハ其ハ点ナキヲ如何読ケルヤ然ハヲコト点
起リテヨリ読下シニスル読方ヲ失ヒケルカ実ノ唐法ノ読方テ
得ハヲコト点モ今ノ通書点モ無用ノ物シ幼ヨリ唐音ヲ言シ
教唐山ノ書読シ和語ヲシラズハ必漢字ヲ読下スコト不成ヘシ生
徒ニ点ヲ用テ和語ヲ交テヨム故唐山読ハ出来ズシ今ノ本邦
ノ人ニテハ何程唐音ヲ習得タリドモ読下シテ義ヲ通ズルコトハ
ナラズ読法ヲ傳ヘザレハ世昔時遣唐使唐土ニ入唐帝
朝ニ入役人モ勤タルニヨモヤ返リ点ノ読方ニテハ日用ノ御
用モ不可辨此読方不得遺憾ト云ヘシ後来何レノ代カ
発明シ得ルモノアルベシ

古詩ノ作法古昔ヨリ今ニ至ルマデモ作法得ザリキ文化中
備前ノ人倉ニ庵ト云詩人始テ発明シテ古詩作法ヲ自得
シタリ是日本始テ詩法千歳ノ久シキ不分ヲ得タリ漢
文モ亦此例アルベシ

一唐山歴代唐(トウ)虞(グ)夏(カ)殷(イン)周(シウ)秦(シン)漢(カン)三国晋如此假名ヲ
振タリ秦晋同ナレハ平シン又ハダシン晋ハシント呼是清音ヲ
敷ルノ義ナリ近来ハ秦ヲ濁音ニテシント云フ
然ニ濁音又久シ楽名秦王破陣楽ヲ秦王(ジンワウ)ト濁リ呼フ
千古敏達天皇以来ノ音ナリ今又ジント読ヿ挍百ト云ベシ

一平胡籙矢カラニ

如此マワ矢ヲサシテ
次ニ矢カラニノ末ヲ
左ヲ右ヘ右ヲ左ヘ組
カヘシテ上ニ箭ノ方西
方ヘヒラク

箭ノ方

右図ノ如ク並ヘテ次ニ又矢カラニノ末ヲ矢ノ後ノ方ニテ左ヲ
右ヘ右ヲ左ヘテカスカヒノ外ノ方ヨリワナニシテ入レテ鳥ノ金物ニ
カケ(フトシ様ノグリヲシメルカ如シ)次ニ蛛ノ金物付シ方ノ緒ヲ四節ノ糸二節ワク
リカケテ中ノ処ルニテ蛛ヲサシハサム様ニメ其末ヲ又後ノ穴ヲ通ス
ニ後ノ穴ヨリ外ニ引出シタル左右ノ緒ヲ又組(ゆ)テ穴ヘ引出メ
前ニ引出ス上差ヲ揃上差ノ上ヲ解ヌ様ニ結フシ口ニ紫草ハ
本法ウラヲ打心ニテ縫クハムフシコレ肩ヘ掛ル料シ口丸緒前
ノ穴ノ中ノニツノ環ヲ引通シテ腰ヲ繞シテメル料シ

一食セズ飢ザル方串柿ヲ糊ノ如クシテ蕎麦又蜀黍ノ粉
又糯ノ粉右何レニテモ交合セ大梅干程ニ丸シ朝供出
不ル村ニ二三丸用ユレハ一日ノ食ニナル

一酒酔ヲ不忘方 葛粉ヘ龍脳酒ニ浸シ幾度モヒタス 酒ニ漬
又漬数度ニ至ル 白色ニナルナリ カタメ常服ニスル 用ル時割リ湯又
水ニ入呑則酒トナル

一釘抜法 木ヘ打タリシ釘不抜ニハ紙燭トモシ其油ヲ釘穴ヘ
入浮出ルヽ 蠟燭星煙(?)淀(?)出ル 夫ヨリ安シ

一古昔雪隠ナシ 私(シノ)箱ト云物アリ 今ノヨカハヽ 後架(コウカ)ト云ハ家
後ヘ作リ掛タル一廁ゝ 箱ト云ハヽノ箱ノ事ゝ 唐山ニテ厠子ト
云ヲカハノ事ナリ

世ノ中ハ喰て糞て寝て起て扨そ後ハ死ぬる斗そ　一休

一気ノ労ヲ強クスル薬方 麒麟血五匁ニ下候 蒲黄六匁アヅル 人参一匁外ヲ去
沉香一匁ニ下候 辰砂二匁能スリ水ニ浸シ上ヲ気ヲナサル 右粉薬ニメ白湯又ハ水ニテ
用多サハ人ニノ気色ニ依ヘシ 但無病ノ人余リ不可過 此薬チテ
負ニ限ラス常人可用 又伏兵ノ時用之 気強ナリ 退屈ナシ

一寒ヲ防方 鶏卵十匁 酒ニテ煉リメ日ニ干 干姜拾匁 肉桂五匁 丁字八匁 候
防風三匁上気ヲ去 羌活五匁 独活三匁 桔梗二匁以ヲ去 桂心五匁甘候
右九味細末ニメ塩煉分料 寒ノ気ニ依ル 又薄尽不寒ヽ湮(?)
気ヲ去 又方 玉子 干姜 等分 酒ニテ煉用之

一暑気除方 何草ニテモ七種丸メ呑ヘシ 卒腹痛ニ妙
暑気ニ中タルニ用法 今枇杷葉ヲ採浴シテ暑ヲ除モ亦同シ
血留ニ草十三種揉テ付 忽止ル 但蓬三種ノ内ヘ入モニ付ハラ
ヨシトス 此方度ゝ試

一摺降ノ日軍器ノ神ヲ祭 唐土ニテスル事ゝ

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1
ガラス使用

一明朝ニ正月朔日柏枝ニ树餅大橋ヲ付祝フ是ヲ百事
大吉ト祝ス柏枝大橋
右字音相通スルヲ祝スルケ様ノ祝和朝ニ多アリ此説ヲ名
詮ト名附ク橙ユヅリ葉カンダハラ勝栗等皆名詮ナリ

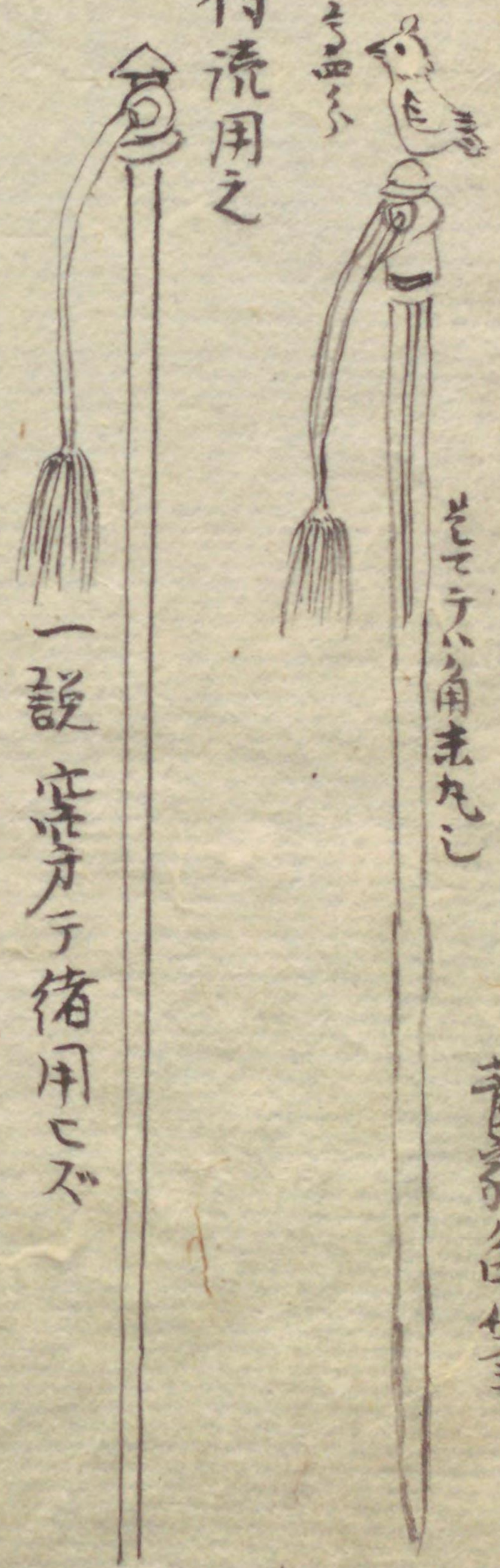
一赤烏帽子 小笠原持長ノ射御指遺集ニ云流鏑馬射装
束小チヲサシ笠ヲ著装束ニ作花等ヲ附トニ云ニ又ニ云エ
ボウシヲ朱塗ニスルモ著シ檜笠杯モ用セ
松浦侯ノ五世ノ先祖源義天叟公ト称ス松浦肥前守
春江公ノ後ニ平戸ヲ領ス未タ任官セス永享七年京ニ
入大将軍足利義教公ニ謁セントス時ニ取次ノ者通セズ
故ニ空ク在京三歳ヲ経タリ義教公石清水八幡宮参
詣アリ其時道ノ傍ニ出赤幘ヲ著（幘ハ帽也）将軍其状ヲ見
テ問ヒメシニ松浦ト答将軍歓玉ヒ幕府ニメサル乃肥前
守ニ任ジ火鐙（鐙ニ紙ノ韜履也）白傘袋（袋ナリ）錦手袴（今松浦ニ錦ノ肩衣ヲ免セラル然ハ別ニ袴ノ領アリシカ）冠木門（カブキ門）ヲ玉ハル門建ノ免許シ玉フ
以下略 赤烏帽子著図ハ義教公其容貌ヲ写真セシ
メ甲刕恵林寺僧ニ題讃ヲ命シ下サレケリ南禅寺ニ収蔵（トミエ）

一古代仮名 ム（仏 成仏スル也 振矣ノ省ニ） 孑（孫ノ省 ミ也） 禾（和ノ省 ワ也） 不（祢ノ省 子也） 尓（ニ也） 乃（ノ也）
丁（テ也 万ノ マ也） 尸（ホ也） 匕（ヒ也 左ウ省） 戈（セ也） 乀（ヘ也 件ノ省） 川（ツ也 州ノ省）
右古書ニアリ故ニ古書読ノ必用ニ

一鉄砲発鳴強ク鳴ザル仕方アリ塩ヲ焔硝ノ一斤ニ一匁四分ト入
レバ不鳴ハ音 発中障リナシ

一千度 安斎翁千度万度祓ハ伊勢千部万部ヨリ神前祓スルニ又同音
東鑑 延応二年六月十八日千度祓勤行アリ

一角筆 白王太子親御読書始ニ用ヒラルヽ突字杖ナリ
角竹筆ノ名江家次第ニ見エ
鶺鴒 口喙ヨリ尾迄六分 杖ヲ以テ造
菅家角筆


三四分
先ニテハ角末丸シ
侍流用之
一説 突刀テ備用セズ

一痨瘵虫下ハ虞天民カ醫學正傳 神授丸早用ル寸ハ虫ヲ
下リ治ス遅キ寸ハ虫下レ𪜈体疲テ終ニ死ス奇病ニ早ク可用

一五斗味噌 軍陣中ノ要用ノ物ナリ 米糠五斗 大豆壹斗
糀三斗 塩五升 右捣合セ三十日スギテ用ユ 一名スカミソ

一名物冑
水牛 蒲野若狭守 大水牛 黒田長政
唐冠 日根野織部 鐘馗耳 二尺五寸ノ脇立冠纓ニ牛ヨリ折目アリ
十王頭 原隠岐守 四股廣角 福島正則 忠信冑 本多中書 大ノ字アリ
鯰尾 蒲生氏郷 剃髪 休木久内 山鳥 細川三斎
一ノ谷 竹中半兵衛 二ノ谷 明智左馬助 鉢盔峰 柴田伊賀守
鯉冑 兵田作十郎 諏訪法性 武田信玄
八日月 秀吉公八日月ノ輪ハ幡生ノ端ニ掛ト又云天正十五年西国不斉征移ノ
祝ニ日根野織部献之八日月後立ナリ天下一隠ニテハ冑上ニ立ル
角頭巾 台徳院様 長烏帽子 加藤清正 帽子 藤堂和泉

一大口 今猿楽ニ用之来ハ直垂ノ袴ノ下ニ重子テ着タル下タ
袴ナリ

一三絃(シヤミセン) 永禄年中琉球国ヨリ蛇皮線始テ渡ル琉球楽器ナリ
元来二絃ヽ泉州堺ノ住琵琶法師中小路(ナカセウヂ)ト云者傳ヘ得タリ
長谷観音ノ霊夢ニ依テ一絃ヲ加ヘ三線トス今ノ三絃是ヽ
中小路ヨリ石村伴沢沢住相傳ス寛永中措列加賀都城秀
堪能並ビナシ加賀都ハ柳川トロウス城秀ハ八橋ト云皆検校ニ
経昇シテ三絃ノ鼻祖ヽ其目録本手組目録一琉球組二ヲ
鳥組三ヲ腐組四不祥組五飛燕(セン)組六忍組七浮世組合七曲
本組ト云○端手目録一待テゴザレ二葛無葉三比良ヤ小松四
長崎五下総羅六京簾子七端手カタバチ合七曲新曲ト云フ
柳川検校作ヽ裏組目録一賤(シヅ)二錦木三青柳四[illegible]五
八橋(ヤツハシ)六翠簾(ミス)七ナヨし合七曲同作

三絃ハ淫声ノト俗称ス浙ヽ唱歌音律ニ協フモノハ雅声ノヽ
楽器雅声ノ調和スルハ淫声ニアラストヽヽ

一産婦姙婦胞ヲ埜ヽ胞ヲ食スレハ小便滞テ水腫トナル
経験セシ方ヽ本州医書ニナシ故医師是ヲ不知ヽヽ

一犬追物文安四年四月将軍義政公下加茂川合ノ社東北ニ
興行又寛正六年八月興行又永禄三年三月三日興行
東西四十二間南北四十間云ヽ

一肩衣今ハアイ後大双紙ニ云袖ナザル直垂法然繪傳ニ
肩衣大口ノ袴キタル者九ニ三在此繪伏見殿ニ

一法華安爾名云白華ヲ今世法華ト云ハ誤ナリ萬仔ノ草道
母説保元物語ヲ八義朝ノ公達誅サレタル条見人ノ五十余人

濃ヲ流中ニモ汲多野ヵ緋威ノ鎧ノ袖ハ洗革ニヤ威スラン
緋オトシヲ洗革ニテ威タルト云ヘルトシ 又當上年皆持人布衣ヲ薄紅ニ染
メルヲ退紅ト云紅色ヲ洗退ケタル事ニシ延喜式ニハ桃花布
トアリ桃ノ色ハ薄紅ナル故紅色ヲ洗ヒ退ケタル意ニテアラ
染ト云リ西宮記洗染布袍ヲ着トアリ 廿〓ヲ仁家以ニハ
退紅ノ袍ト書リ是ヲ以洗染ヲ荒染ト思洗セシナリ
右ノ説十分ニハ思ハサレ氏一説故書ニ記ナリ
一日月餅ノ寸包御殿 旧云 古代ハ揚餅ヲ以調進延喜ヲ以テ極
薄女儒常ノ御殿ヲ奉裹テ撤シ古代ハ御殿ヲ常
包タテテヘルシ近代ハ餅ニ当ル方ノ御柱ヲ包ハカリシ極薄
ノ役也 梅ニ廿示所ニ云陰気ヲ障除スルノ意ナリ

一瘡疾ノ灸 六七帖 松高ニアカ江戸ノ奈良ノ前ニ居シ藩中奥中ニ見ヨト借
コセシヲ見ナカシニモシモ遺リクタケレハ玆ニ記ス
天保七年十二月小生瘡疾ヲ患フ甚ダ僕傍学医才
ニ灸朝用此灸法令治ス
左右足之大指ノ次正中爪岸ヘ
但灸症ハ三三フルヒメ朝灸
スヘシ如此ロハ一火シ左右共ニ同

一海蘿軟柔煮ニハ米ノ白洗水ニテ煮椒醤油書シ煮スヘ
和トクトク煮申シ イリコニテ宜ク候
一食癒心下並痞有ニ悪噫スル寸 麦牙（モヤシ麦）
右一味湯並用速ニ胃和シ治ス好ヤ也大便不通
心下脹ニ用テ治ス 天保七年十二月作ス
一膃肭臍（オットセイ） 一名海狗腎（タケリ） 數云用酒浸一日紙裹テ炙香斷ニ搗或於
銀器中ニ以酒並熱合業同時珍云以漢掛樟脳同收則不壊 花時不損

気味鹹大熱無毒　味耳香姜大温
主治悪夢鬼魅狐魅心腹痛中悪邪気宿血結塊痃癖
羸痩　男子宿癥気塊積冷労気腎精衰損
多色成労痩悴
補中益腎気　暖丸　腹腰膝助陽気破癥結痃驚
狂癇疾
五労七傷陰痿労腎虚背膊労悶面黒精枯
家良
一粒金丹　治五労七傷男女諸般虚嗽咳疾吐血嘔酸及胃噎逆
風痺疾疰冷涙鼻流清涕水泄痢疾心腹脹痛
腸鳴痞塊酒血食黄水気宿食不化飲食減少
左癱右瘓

海狗腎　阿芙蓉各二分　龍脳　麝香各三分
原蚕蛾五分
右末ニシ入磁器内別用焼酒二鍾煮附干草数至八分
傾於前碗内放水面上炭火滾四五次取出丸　砂糖
梨汁送下
一通気　天文方足立重太郎父エレキテルヲ創造ス其気ノ
通徹可悪者人理無子尋常ニ無之故其創作蘭工ニ依
カルヘシ又出生年勝所ノ医山田大円ノエレキテルニテ試タルニ
不異之大坂ノ天文家間五郎兵衛先代ヨリ持伝タル原字硝
子板ヲ以テエレキテルノ大車ニ造奇効神ノ如トナリ左ニ右ヘ
旋木車ニテサヘ良工ノ創造人ヲ驚ス其気ノ感徹スル了

何ナル人ニ違リテモ金紙又ハ張銅ヲ持並ヘタルニ一時ニ押通スル
コト心得ヲ貫通スル如シ但地気ヲ絶ヲ以用ヲナス地気ヲ
絶ハ蠟或ハ松脂ヲ揃中ニ流シ満其ノ足各是ヲ置ノミシ
按ニ世ニ大ヲ忌トテアリ金銀ヲ煉細工スル時或ハ死穢
或ハ血穢アルモノ来只拘言テ不痛甚大ヲ以テ烟草ヲ呑
爰陽ヲ吹トキ金銀忽散乱シテ失ス穢ニ障故ナリ
此揮気ヲ忌ハ陰気悪穢ノ気ヲ以テ天ノ清気ヲ破ル
シ凡人身中コトくク血水廻満有之若シ血破レ出レハ忽
穢ル血死ル故ニ女人ノ血気血死出スルニ生血ハ天ノ精気
死血ハ地ニ属シ汚陰ナルニ眩術ヲ成シ或ハ神ヲ除等
ノ事血ヲ穢シハ忽破術ス是陰汚陽精ヲ破スルナリ

今俗死忌血忌スル事甚理ヲ弁ヘザレ共言傳ニテ甚
忌其故右ナリト知レリ
今モ新嘗会大嘗會天子自ラ天ヲ祭玉フ時廷薦ヲ敷
又墓祠禱其余重祭ニ新席ヲ布陰気ヲ除シ天ヲ祭ノ
儀ナルベシ蚕飼織女鉄醤油ヲ忌テ不傳汚穢ヲ忌ナル
ベシ

一
中風奇灸
脊翔日男左女右膝折目内ノ方
筋ノ通リヘ三壮又治ス
五壮ニテモヨシ

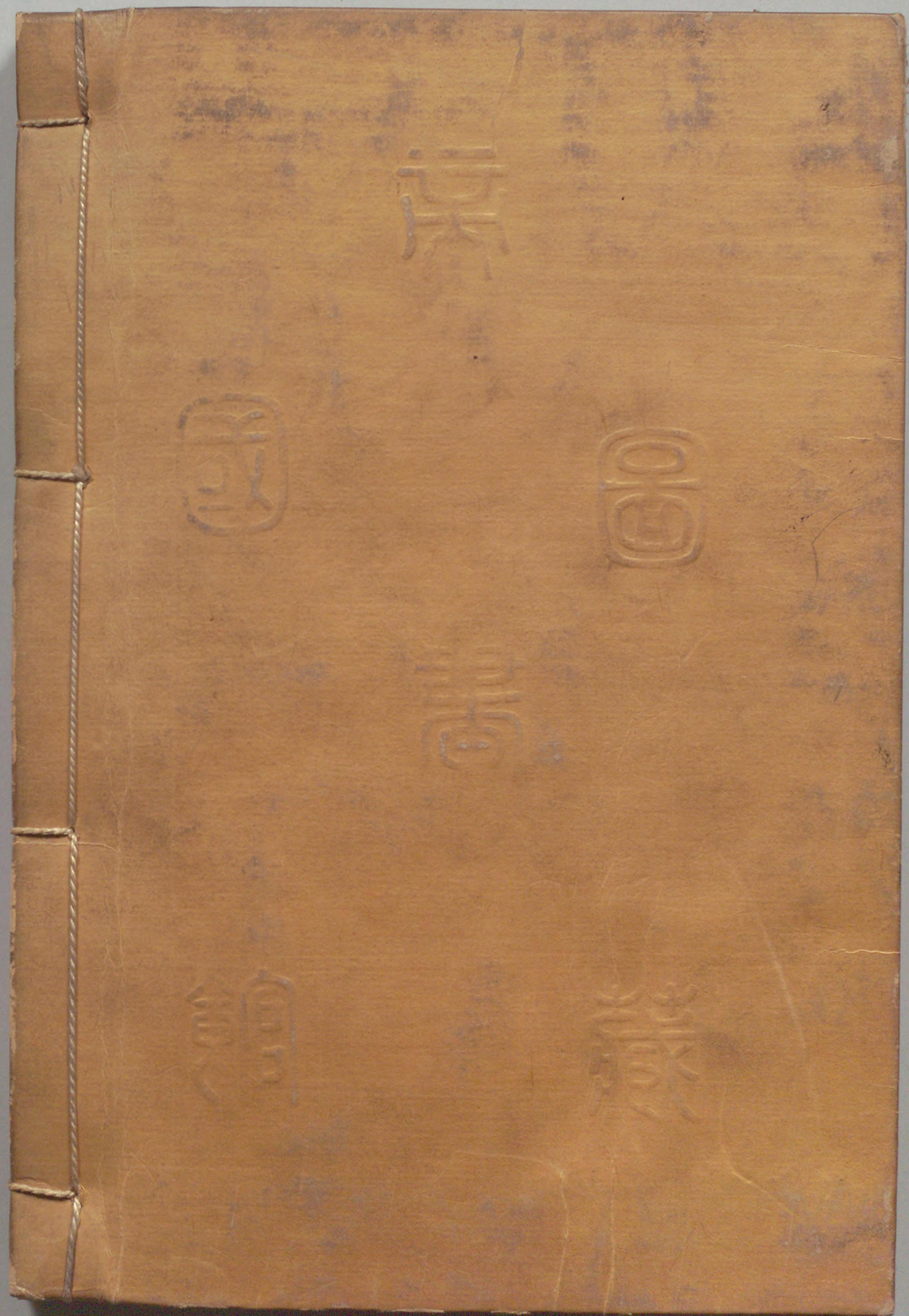
国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用

238
289
1

国立国会図書館　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用



国立国会図書館　　鶯宿雑記 238-1

ガラス使用